

早稲田大学本庄高等学院

2019 年度学校自己評価・関係者評価

1. 教育理念・目的・人材育成像

早稲田大学は早稲田大学教旨に示された3つの建学の理念、すなわち「学問の独立」・「学問の活用」・「模範国民の造就」に基づき、教育・研究を展開している。その上に、00年に「21世紀の教育研究グランドデザイン」を発表し、08年には創立125周年を契機に「Waseda Next 125」を策定して「早稲田から WASEDA へ」をスローガンに定めて広く世界で活躍する人材の育成に努め、グローバルユニバーシティとして構築することを目指すこととした。さらに、創立150周年を展望した「Waseda Vision 150」を12年11月に策定し、「アジアのリーディングユニバーシティ」として世界に貢献する大学であり続けるためのビジョンを社会に公表し、目指す方向性を明らかにしている。

早稲田大学本庄高等学院（以下本庄学院と略）は早稲田大学創立100周年を記念して1982年に男子校として開校した。2007年に男女共学となり、2012年に現在の校舎に移転した。全国各地および世界各国から、将来早稲田大学を目指す意欲的な生徒を集め、自由と自立の校風の中、「自ら学び、自ら問う」という教育方針のもとで「進取の精神」に満ちた活力ある生徒を育てることを教育の基本としてきた。

加えて、本学院も「Waseda Vision 150」に関連し、12年11月、「本庄高等学院の将来構想」を発表した。すなわち地域の特色を生かした「森に想い土に親しむ」教育をいっそう発展させた、教科横断型の教育・研究活動を通して、社会の各分野で活躍できるリーダーを育成することを目的としている。本学院は早稲田大学での一貫した教育体系の中に位置づけられ、卒業生全員が早稲田大学の各学部に進学すると規定されている。したがって本学院は、早稲田大学教旨・「Waseda Vision 150」、そして「本庄高等学院の将来構想」に基づいて教育・研究活動を行なうことが目的である。生徒に対しては、知的関心を高め論理的な思考力、豊かな感性を育成し、さらに大学における専門的な学問の分野も模索させ、また大学での幅広い本格的な学問研究に必要な、基本的な学力・体力を養成することを目指している。その目的は本年度においても継承されている。

2. 教育課程・学習指導

2.1 教育活動

（ア）カリキュラム

カリキュラムは1年次から3年次まで各年度32単位構成で3ヵ年96単位となっている。

- ・ 1年次：芸術科目の音楽履修クラスと美術履修クラスに分け、その他の必修科目は共通に履修する。
- ・ 2年次：ゆるやかな文・理選択分けをしている。文系は古典（2単位）を選択し、理系は物理（1単位）および科学課題研究（1単位）を履修する。また、数学Ⅱ（3単位）は、文系は経済や商学部で必須とされている内容を、理系では理工学部での学習の基礎となる内容を扱っている。
- ・ 3年次：32単位の構成は、理文共通科目（15単位）、必修選択科目（12単位）、自由選択科目（2単位）、総合的な学習の時間（2単位）、HR（1単位） となっている。文系と理系では必修選択につい

て科目および科目数が異なる。文系は 6 科目 12 単位、理系は 4 科目 12 単位である。また「総合的な学習の時間」は、キャンパスに素材を求めた半期ごとの輪講形式の「大久保山学」(1 単位)と、「卒業論文指導」及び「修学旅行事前学習指導」を行う「課題研究」に配分している。

(イ) 必修科目

必修科目の授業計画は、毎年、前年度の生徒の授業評価結果の分析・検討に基づいて作成している。また、すべての教科において年度初めにシラバスを作成し、それに沿って授業を展開している。

第 1 学年では主に基礎学力重視の観点から、中学校の内容との連続性を意識した展開を、第 2 学年では学力の充実・発展の観点から構成を考えている。第 3 学年では大学での教育との連携を意図して、各科目の特徴を捉えて授業を行なっている。

授業の基本方針は、わかりやすい授業、探究や思考力、判断力、表現力を高め、生徒が主体的に取り組めるような授業形態、大学への架け橋となるような専門的な内容を盛り込んだ授業、社会との関わりを意識した授業を心がけている。

具体的には理数教科で学部教育の基礎となる学力の強化をはかるべく、一定の基準に達しない生徒への追試や補習授業を行なった。さらに語学や人文社会科学系の科目では、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業も多く、またプレゼンテーション技術の習得や論文執筆指導を含む授業展開も多くなされた。最近では、反転授業・ジグソー法などの新しい授業形態を取り入れたもの、複数科目のコラボレーション授業など、新しい授業形態への取り組みも多い。また、各科目の節々で、本学院の特色である論文教育を推進するアカデミックリテラシーを意識した授業展開がされている。

(ウ) 選択科目

- ・ 2 年次：どの分野に進む生徒にも、数学Ⅱ及び数学 B は必修としている。ただ、理工系で必要とされる内容と経済や商学部などで必要とされる内容は異なる部分もあるため、数学Ⅱに関しては、文系用と理系用を用意し、選択させている。また、文系には古典を、理系には物理・科学課題研究を用意し、考えることと実際に体験することを軸に据えた授業を展開している。
- ・ 3 年次：本学院のカリキュラムの最大の特徴として、3 年生に豊富かつ多様な選択科目を履修させていることが挙げられる。音楽や美術、第 2 外国語（仏、独、中国、朝鮮語等）も含む選択科目は、必修と自由を併せて合計 7 科目 14 単位を選択することが規定となっている。具体的な内容としては、学部の専門科目の導入的な性格を持つもの、時代に必要とされる力を意識したもの、早稲田の一員ということを認識させるものが設置されている。

(エ) 英語能力試験

4 月に GTEC Advanced (3 技能)、9 月に TOEFL ITP もしくは TOEFL Junior を実施した。これはいくつかの学部で英語力が進学の際の資格要件として課されているということ、どの学部からも調査書と共に英語の外部テストスコアの提出を求められていることに対応するためでもある。

(オ) 大久保山学

「大久保山学」設置の趣旨は、キャンパス環境を利用した学習教育プログラムや、学際的かつ総合的な

視点から学習に取り組むことで、断片的な知識の集積ではなく、総合的な理解力や判断力を養成することを狙いとしている。本学院を取り巻く自然環境や歴史的遺産を、生きた教材としてカリキュラムに活用するという考え方がその基となっている。

本学院は本庄市の浅見山丘陵に位置し、面積は70数ha、長辺は1.5kmに及ぶ。丘陵の一部の字名は「大久保山」であり、通称的に丘陵地帯全体を大久保山と呼んでいる。ここからは埴輪や土器などが大量に出土しており、丘陵周辺の平地には条里制の遺構跡も発見されるなど、山全体が歴史的遺産と位置づけられる。

また「希少野生動植物」に指定され保護対象となっているオオタカをはじめ、多くの野生生物が棲息し、多様な樹木や植物が繁茂している。さらに本庄キャンパスのわきには川が流れ、科学関連プログラムの水質・生物調査の対象になり、地域との交流の舞台にもなっている。

本学院は「将来構想」(2012年11月公開)の中で「大久保山学」を教育の特色の一つとして位置づけ、具体的にどのような教育プログラムが展開できるかについて検討を開始した。そして13年の「Waseda Vision 150」の中で、「地域の特色を活かした『森に想い土に親しむ』教育を一層発展させた『大久保山学』をテーマに、科目横断型の教育・研究を通じて、社会の各分野で活躍できるリーダーを育成する」と基本理念を定め、その実現を図るための教育プログラムを「大久保山学」としたのである。

授業は木曜2時限目、8講座同時開講とし、前期と後期で異なった講座を履修するセメスター制とした。生徒は9通りの組み合わせパターンのひとつを選択することとしている。以下は2019年度の大久保山学の一覧である(左:前期科目/右:後期科目)。

1. 「大久保山に住む人ってどんな人たち？」／『平家物語』から見る武蔵武士
2. 「本庄キャンパスを Web で世界へ」／「大久保山に住む人ってどんな人たち？」
3. 「不確実性下における意思決定入門」／「Silent Spring を通して考える環境破壊と大久保山」
4. 「Silent Spring を通して考える環境破壊と大久保山」／「大久保山の環境と生物多様性」
5. 「大久保山での学びと数学」／「本庄市周辺の歴史と文学」
6. 「『平家物語』から見る武蔵武士」／「自然がつなぐ科学たち」
7. 「大久保山の環境と生物多様性」／「本庄キャンパスを Web で世界へ」
8. 「自然がつなぐ科学たち」／「大久保山での学びと数学」
9. 「本庄市周辺の歴史と文学」／「不確実性下における意思決定入門」

(カ) 課題探求

第3学年の木曜3限に総合的な学習の時間「課題探究」を設定している。この科目は第3学年の組主任8名で担当し、年間20回の授業を修学旅行関連学習に約10回、卒業論文指導に約10回を年間計画で配置し実施している。同時に、学年集会(ガイダンス・学院長による修学旅行関連講話)や学年行事(教育実習生によるパネルディスカッション)との関係も図った。

修学旅行関連学習では、事前学習の全体講義を2回、北京・韓国・台湾のコース別事前学習8回(ガイダンス、班決め・実行委員決め、しおり作り、交流時のグループ分けと発表準備、結団式)を行ない、事後学習1回(アンケート)を行なった。修学旅行不参加者については、PC室で卒論執筆作業を行なわせた。

卒業論文指導の一つとして、GEC(Global Education Center)ライティング・センターによる講義を3回

行なった。同センターは、アカデミック・ライティング（学術的文章を書く技術）ルールを踏まえ、分野を問わず早稲田大学の学生・教員の「書く」ことをサポートしている。本学院の多くの生徒が学部進学後も同センターの指導を受けることになるので、高大連携・高大一貫教育の観点からの学習効果が高いと考えられる。

さらに、理系教育実習生によるパネルディスカッションを1回、組主任によるクラス別指導を5回実施した。

このように木曜3時限目を総合学習に振り替えたのは2017年度からであり、今年度が3年目である。第3学年の教育活動の核となる修学旅行と卒業論文について、授業時間での指導・準備が行なえたことの意義は大きい。この科目の設置によって、放課後に生徒招集の必要が多かった16年度までと比べ、生徒・教員の準備活動に余裕と深みをもたらした。

（キ）卒業論文

卒業論文制度は開校以来実施している、本庄学院教育の特色の1つである。卒業論文の提出が学部進学必要条件となる。

2017年度より導入した、早稲田大学ライティング・センターによる学年単位での卒業論文の一斉指導「卒業論文を書くための基礎講座」を、今年度も行った。3年次「課題研究・総合学習の時間」（週1コマ・50分）のうち年間3時間をこの講義に充てた。ライティング・センターという学院外の箇所に指導を依頼した理由の一つには、文・理・学際と分野を異にした第3学年336名を、一斉に指導する必要があったからである。これに加え、今年度は第2学年にも、テーマ決定についての講義を依頼した。

講義の時期や内容は、生徒の卒論制作の進捗などに鑑み、同センターと相談の上で決定した。以下に概要を示す。

対象：第3学年生徒全員（総合的な学習の時間として）

担当：進路指導委員会および第3学年団

◆第1回 4月25日（木）3限「卒業論文を書くための基礎講座 1 よい問いから研究デザインへ」

講師：太田裕子准教授（グローバルエデュケーションセンター）

会場：稲稜ホール

◆第2回 6月20日（木）3限「卒業論文を書くための基礎講座 2 学術論文における引用の作法」

講師：嶋田大海助手（グローバルエデュケーションセンター）

会場：稲稜ホール

◆第3回 9月12日（木）「卒業論文を書くための基礎講座 3 わかりやすい文章を書く観点—卒業論文完成に向けて—」

講師：太田裕子准教授（グローバルエデュケーションセンター）

会場：稲稜ホール

対象：第2学年生徒全員（LHRの特別講義として）

担当：進路指導委員会および第2学年

◆第1回 9月12日（木）4限「卒業論文への取り組みを始めよう—テーマから問いへ、問いから研

究デザインへー」

講師：太田裕子准教授（グローバルエデュケーションセンター）

会場：稲稜ホール

対象学年には講義の実施後にアンケートを行ったが、その結果から第3学年生徒においても第2学年生徒においても、講義内容が非常に高い教育効果を生んだことが伺えた。卒業論文の制作過程において、テーマを見直したり深めたりする作業、完成までのイメージを計画的に形作る作業、剽窃・改ざんなどの不正をせずに論構築をする作業など、具体的かつ実践的な方法を教授されたことによって、生徒がそれまでに抱えていた漠然とした不安が執筆への意欲へと、大きく変化したように見受けられた。

次年度以降も、早稲田大学ライティング・センターとの連携を密に保ちながら、学年単位での卒業論文の一斉指導の在り方を模索し、ポストSGHにおいてより一層の教育効果を挙げていきたい。

早稲田大学ライティング・センターへの講義依頼を継続することで、卒業論文指導における高大接続教育のルートを、僅かながらつけることができた。しかし、大学・大学院進学後により充実した研究活動を行うためには、卒業論文で扱った研究内容を高等教育の場に引き継げるような指導体制が望ましい。今後、本校生徒が附属出身者としてのメリットやアドバンテージをより良い形で享受できるような教育デザインを考え、設計していくことが課題である。

2.2 課外活動

2.2.1 諸行事

（ア）早慶野球戦観戦

第1学年では、6月1日（土）に「同じ目的をもって応援し、早稲田大学の一員としての絆を深める」ことを目的とし、東京六大学野球（早慶戦）の観戦を実施した。当日はうだるような暑さであった。女子生徒1名の体調がすぐれなかったため、教員同伴の上休憩をとらせた。試合は接戦となったが見事勝利し、早稲田大学校歌を皆で歌うなど、早稲田としての一体感を生徒は感じる事ができた。そのため目的は達成されたと評価できる。

（イ）体育祭

5月30日（木）に実施した。4月から体育行事実行委員会を開き準備を進めた。また陸上競技部員が審判員をはじめとする競技運営に携わり、実行委員と共に運営を行なった。100m・200m・400m・1500m・本庄スペシャルリレーの個人トラック種目、走り幅跳び・走り高跳び・砲丸投げの個人フィールド種目、借り物競争・パン食い競争・三人四脚競争の個人レクリエーション種目、大縄跳び・綱引き・クラス全員リレーの団体レクリエーション種目をクラス対抗で行なった。真剣に競技に臨むクラスメイトをクラス一体となって後押しする姿が本行事の象徴である。

新しいクラスでのコミュニケーションとまとまりが急速に進み、また第3学年の生徒にとってはクラス対抗で行なう最後の体育行事であり、高校生活の思い出となる貴重な行事であると感じられた。また、実行委員並びに陸上競技部員を中心とした運営役員の手際の良い運営作業により、行事全体が非常にスムーズに進んだ。

（ウ）人権教育

10月16日（水）の放課後に講演会「メディアと人権」を開いた。早稲田大学OBのNHK元専務理事の講師に、表現の自由と人権の尊重・少年法と報道・テレビと人権・インターネットSNSと人権などをテーマに講演をしていただいた。報道による風評被害・少年時代の犯罪に対する報道・SNS上の炎上事件・ネットいじめなどの具体的な話が多く、その多くは誰もが知っている有名な事件であった。特にSNSでのトラブルは学院でも多く発生しているため、学院生全体に向けてSNSの使い方に関する注意を与える良い機会となった。

（エ）球技大会

第3学年修学旅行期間の10月17日（木）に第1・2学年で実施した。種目は、男子がソフトボールとサッカー、女子がバレーボールを行なった。天候にも恵まれ、白熱した試合展開が多く、クラスの団結力が見られた有意義な時間であった。

（オ）秋の学年行事

第1学年では、10月18日（金）に、自然に親しみながらクラスの親睦を深めるべく、玉原高原への校外学習を実施した。玉原高原において、1周約50分のハイキングを行った後、原田農園に移動して昼食を取り、その後、果物狩りを楽しんだ。自分の足で大地に接し、友人とともに、旬の食材を使った料理や果物を味わうことを通じて、本行事の目的は十分に達成されたと思われる。一方で、他の行事でも同様であるが、友人同士のSNS用記念撮影に興じる生徒が多く、あらためて、SNSへの投稿に関する指導を粘り強く行なっていく必要性も感じられた。

（カ）稲稜祭

10月26日（土）・27日（日）に開催した。運営は主に稲稜祭実行委員会（49名）によって行なわれた。今年度より中央ステージの位置が校舎正面へと変更となったが、特に大きな混乱はなく実施をすることができた。1日目の来場者（生徒を除く）が1491人・2日目の来場者が2180人と大変盛況であった。

発表・展示の内容は、学院生企画・同窓会企画に分かれるが、そのうち学院生企画はクラス企画・公認団体企画・有志団体企画・本部企画で構成された。今年度は「紺翔」をテーマにいろいろな改革が生徒自身の力により行なわれた。また昨年度に引き続き、校内装飾に力が入れられた。

（キ）芸術鑑賞教室

11月13日（水）に本庄文化会館で実施した。内容は早稲田大学交響楽団による演奏で、「演奏・学期紹介コーナー」「指揮をしてみよう」コーナーを実施した。特に「指揮をしてみよう」のコーナーは学院生が交響楽団の指揮を体験するというものでとても盛り上がった。

（ク）マラソン大会

12月14日（土）に実施した。体育授業の一環とし、男子約9km、女子約3.9kmの大久保山周辺をめぐるコースで行なった。

2.2.2 課外活動

(ア) 生徒会活動

生徒会活動は生徒会公認団体活動(部活動)や生徒会の専門委員会活動など生徒会の活動すべてを指すこともあるが、ここでは選挙によって選ばれた生徒会執行部の役員たちの活動について述べる。

主な活動は、生徒会予算作成、諸活動の企画・運営であるが、具体的には生徒総会の開催、国内外交流プログラムへの参加、稲稜祭生徒会ブースの運営、生徒会誌の発行、さいたま赤十字による献血の校内での実施であった。19年度の役員も、前年度に引き続き、生徒会活動をより活発にしようとする姿勢が大いに見られた。本庄市内の高校の合同文化祭である「七高祭」について、学内の調整や他校との連携の窓口を務めるのも生徒会執行部の役割となっている。

(イ) 部活動

昨年までと同様に、19年度も文化部門 24、体育部門 15 のクラブが活動した。大学附属である本校では、部活動がたいへんさかんである。

クラブの活動目的は心身の成長を目指すもの、より上位の大会での成果を目指すもの、稲稜祭での発表に力を注ぐもの、部員の親睦を図るものなど異なるが、各クラブはそれぞれの目的に向かって活発に活動した。

運動部門では、陸上競技部で 400m ハードル・棒高跳・円盤投げ・競歩・4x100m リレーで関東大会出場を果たした。さらには、ほとんどの部活で県大会出場を果たすなど、その活躍は目をみはるものがある。

また、文化部門では囲碁将棋部が将棋で全国大会進出・囲碁で全国大会・関東大会進出を果たしている。

部活動の在り方については、部員や顧問の負担軽減の観点から各県で活動時間のガイドラインが出され始めている。教員の働き方改革の大きなポイントの1つとして、本校でも前向きに検討を行いたい。同時に、活動中の事故や健康状況への配慮が求められる時代であり、AED 等安全管理機器・校内の安全管理システムの整備、保健室との連携の再確認が必要である。また、指導中のハラスメントや部員間にいじめや誹謗中傷がないように、教員の認識と生徒への指導が改めて求められる。

2.2.3 講義・講演等

(ア) 特別講義「これがサイエンスだ！」

科学に親しみ、その中から科学に携わる人材育成を目的として、本学院教職員による特別講義「これがサイエンスだ！」を 2013 年から実施している。19年度は以下のように実施した。講義内容についてさらに深く探究したい生徒には後述するゼミ合宿を用意した。

- ・ 第1回(5月20日)「ブラックホールが見つかるまで」(物理科:大塚未来 教諭)
- ・ 第2回(6月7日)「フィボナッチ数列の不思議」(数学科:根本裕介 教諭)
- ・ 第3回(6月7日)「連立代数方程式の解法とその応用」(数学科:太田洋平 教諭)
- ・ 第4回(6月22日)「石油開発に役立てられる技術」(地学科:藤井すみれ 非常勤講師)
- ・ 第5回(11月18日)「キリンの模様を数学する」(数学科:堀綾子 非常勤講師)
- ・ 第6回(11月21日)「ゲームプログラミングの中の高校数学物理入門」(情報科:飯島涼 非常勤講師)
- ・ 第7回(12月09日)「究極の物理法則を求めて」(物理科:渡邊新大 非常勤講師)

- ・ 第8回(12月12日)「大腸菌の遺伝子組み換え」(生物科:坂本玲 非常勤講師)
- ・ 第9回(2月14日)「量子コンピュータは世界を変えるか」(数学科:峰真如 教諭)

(イ)「これがサイエンスだ!」ゼミ合宿

今年度は夏合宿として7月25日(木)から27日(土)、冬合宿として12月21日(土)から23日(月)の2回本庄キャンパスでゼミ合宿を行った。ゼミ合宿では生徒たちは学年の枠を超え各教科ごとに活動を行い、特別講義や最終日には合同発表会を実施した。

夏合宿

夏合宿では昼間は数学AB・地学・物理パートに分かれ各教科ごとに活動し、1日目夕方は特別講義「面積の測れない(?)図形」、2日目の午後には早稲田大学とサイトライセンスを契約したMathWorks社のご協力で希望者対象に特別講義「MATLAB講習会」にてアルゴリズム開発、データ解析、視覚化、数値計算のためのプログラミング環境の体験を行った。

数学Aパートは、グレブナー基底の理論部分の学習とグレブナー基底の実用上の問題への応用についての考察をした。数学Bパートは、フィボナッチ数列に関する諸問題についての研究を行った。地学パートは、地下の流動挙動を予測するシミュレータの開発に取り組んだ。物理パートは、X線による天体の観測技術、顔認識や音声認識を有するロボットプログラミングの技術について考察した。

担当講師:

- ・ 数学Aパート 太田洋平 教諭
- ・ 数学Bパート 根本裕介 教諭
- ・ 地学パート 藤井すみれ 非常勤講師
- ・ 物理パート 大塚未来 教諭、薮潤二郎 事務長
- ・ 特別講義 成瀬政光 教諭

冬合宿

冬合宿では1年生16名、2年生12名、3年生8名が参加し、数学、生物、情報、数学パートに分かれて研究活動を行い、1日目夜には、本学院数学科専任教諭による特別講義「方程式の解の考察」、「数列の整数性とクラスター代数」というタイトルで連続講演、3日目には成果報告会を行った。

数学パートでは、キリンの模様の発生を、反応拡散方程式やセルオートマトンを用いたシミュレーションで再現した。物理パートでは、現代物理学の入門として、行列力学、量子力学、波動力学の基礎を学び、Excelによる水素原子の電子の動きのシミュレーションを行った。生物パートでは、遺伝子の発現や選別について学び、GFPを用いた大腸菌の遺伝子組み換え実験を行った。情報パートでは、unityを用いた猫がジャンプをしながら雲の上のゴールを目指すゲームの作成、Arduinoを用いた指紋を検出するセンサー回路の製作、Pythonによる音声解析、高速フーリエ変換でのノイズ除去など多彩なテーマで活動を行った。

担当講師:

- ・ 数学パート 堀綾子 非常勤講師
- ・ 物理パート 渡邊新大 非常勤講師
- ・ 生物パート 坂本玲 非常勤講師
- ・ 情報パート 飯島涼 非常勤講師
- ・ 特別講義 太田洋平 教諭、根本裕介 教諭

2.2.4 高大一貫教育

(ア) 学部説明会

第2学年を対象とする学部説明会を、6月1日（土）と10月18日（金）の2度にわたって実施した。

6月の説明会は、例年と同様に午前の部と午後の部に分けて行なった。午前の部は、早稲田キャンパスにて午前9時より開始し、社会科学部、教育学部、政治経済学部、商学部、法学部の順で、各学部の教員によって30分ずつの説明がなされた。午後は、文系選択者と理系選択者とに分かれ、文系選択者は戸山キャンパスに赴き、文学部と文化構想学部についての説明を受けた。理系選択者は西早稲田キャンパスに足を運び、基幹理工学部、先進理工学部、創造理工学部に在籍する本校卒業生から、それぞれの学部の概要や学生生活の様子などについて説明を受けた。

10月の説明会は、本学院の稲稜ホールにおいて実施された。国際教養学部、人間科学部、スポーツ科学部、の順で、各学部の教員により30分ずつの説明が行なわれた。特に国際教養学部の説明は本学院出身の教授が学院時代にすべきことなど今何をすべきかを英語を交えて説明してくださり、聴衆の心をつかんでいた。

学部説明会は、それを通じて生徒がそれぞれの学部・学科への理解をより深いものにするだけでなく、附属校生としての自覚を新たにし、また自身の学びの幅を広げる機会にもなっている。

(イ) 理工3学部説明会

6月8日（土）の13時30分～16時50分に西早稲田キャンパスにおいて理工3学部による「附属・系属校生徒のための進学説明会」説明会が行なわれ、第2学年理系進学希望者が出席した。説明会は同時並行で、2会場で行われ、生徒は教室を移動しながら、自身の興味のある学部・学科の話を聞いた。

例年午前中には本学院独自の取り組みとして、希望者に対して、理工3学部および教育学部理学科のいくつかの研究室を訪問する、ということを行なっている。今年度は、電気・情報生命工学科、教育学部理学科（生物学専修）からの協力を得た。生徒たちは、研究の現場を垣間見ることができ、今後の進路の参考とすることができた様子であった。

(ウ) 「法学部への招待」

9月15（日）、法学部の主催による「法学部への招待」が行われた。これは、学院生が学部選択するにあたり、法学部への理解を深め、適切なマッチングを促すことを目的に企画された行事であった。早稲田キャンパス8号館（法学部校舎）を会場とし、学院生60名、保護者61名が参加した。

内容は、法学部教員による学部紹介、弁護士など法律実務家による模擬裁判実演、現役の法学部生との個別懇談、トークセッションなど多岐にわたった。本学院の出身者が法学部卒業後にどういった進路を選んでいるかや、近年関心の高い留学についての詳細な説明もあり、参加者の関心に沿うように企画されて

いたことから、法学部への進学を検討している生徒や保護者にとって非常に有意義であったと思われる。今後の継続が期待される。

(エ) 秋のキャリアデザインウィーク 「進学の部」

昨年度までは、全学年生徒が任意で参加できる早稲田大学各学部の教員による出張授業を、7月に「サマーセミナー」として開講していた。しかし、開講時期が夏休み開始直後であるため、部活動の大会や合宿・短期留学等の生徒活動と重なることも多く、年々参加者を減らしている。そこで、今年度は、授業期間中の放課後での開講を試みた。もともと12月に実施していたキャリア教育講座である「ウィンターセミナー」の開講時期も併せて移動し、「秋のキャリアデザインウィーク」として9月の水・土曜の放課後、4回にわたって実施したのである。「サマーセミナー」はその「進学の部」として名称を変更し、9月の水曜放課後に2回行った。

早稲田大学各学部の教員が出張授業を担当してくださったことで、講義のラインナップは多彩で興味深いものとなった。しかし、生徒の参加者は当日まで集まらず、17講座中7講座を人数1ケタで実施することになった。参加者数の不振は開催時期の問題ではなく、学部進学に対しての学院生の意識の低さにあることが明白である。授業期間内の放課後に開催することについても、学校として講師を迎える体制が整いにくいという課題も残すこととなった。「秋のキャリアデザインウィーク 進学の部」を従来通り高大一貫・高大接続を担う学校行事の要の一つとして位置付けるならば、次年度開催の際は、参加に強制をかけるなど、具体的かつ大胆な改善が必要になるだろう。

(オ) 学部開放科目

早稲田大学は多くのオープン授業を開講している。本学院は、大学キャンパスへの移動時間の関係で学部開放科目の生徒の受講は、水曜日と土曜日の午後が中心となる。19年度は、「法曹の仕事を知る「生命医科ゼミナール」「日本考古学概論」「WEB デザイン実践」に各1名の受講があった。

3. キャリア教育（進路指導）

3.1 キャリアデザイン講座

2018年度より、新学習指導要領で示された「キャリア教育の充実」を意識して、本学院の同窓生や本学校友などを招聘して「キャリアデザイン講座」を連続的に行なっている。この講座は2019年度、下記3.2「秋のキャリアデザインウィーク」に吸収させたらどうかという意見もあったが、年間日常的に行った方が効果的であるという考えから現在も継続している。基本的に土曜日の放課後90分ほどを使って実施している。参加者は希望者である。

以下は、2019年度行った講座である。

- ・ 4月27日（土）「日々決断をする人生」、講師 塚田祐之氏（元NHK専務理事）
- ・ 5月25日（土）講師 鈴木聖二氏（元埼玉県議会議員）、永沼宏之氏（元行田市議）
- ・ 7月13日（土）講師 三木アリッサ氏（アメリカ・オーストラリアで起業）
- ・ 10月12日（土）講師 吉田信解氏（現本庄市長）…台風のため休校となり中止

年度当初は受講生が多いが、会を重ねるごとに少なくなる傾向がある。年度当初は1年生が多く参加するためだと思われる。業種による理由もあるようである。学校としては、華やかに見える仕事だけでな

く、様々な仕事の魅力を感じ取ってほしいと思っている。いかに受講生を増やすか、が問われている。

3.2 秋のキャリアデザインウィーク 「就職の部」

「2.3.2 課外活動 秋のキャリアデザインウィーク「進学の部」」で記した通り、昨年度まで12月に「ウィンターセミナー」として開講していたキャリア教育のためのセミナーを、「秋のキャリアデザインウィーク」「就職の部」として、9月の土曜の放課後、2回にわたって実施した。講師選定のために教員が直接卒業生に声をかけたり、同窓会組織の協力を仰いだりした結果、講師には弁護士・会計士・国家公務員・JAXA勤務・NHK勤務・広告代理店勤務・航空会社内定者等々、多彩な職種の顔ぶれが揃った。

当日は飛び入り参加者も多く、定員オーバーになる講義もあるなどいずれも盛況であったので、開催時期を9月に移した意義は非常に大きかったと感じた。学院の卒業生たちが大学や社会でどのような活躍を見せているのかについての、学院生の意識と関心の高さが改めて明白となった。

4. 生徒指導

4.1 生徒指導の方針

本学院は、入学定員320名という比較的小規模な学校であることのメリットを生かし、各教員が生徒との関わりを密接にもち、個々の生徒に目が行き届くような指導を心がけている。19年度は、18年度に引き続き以下の3点を重点目標として指導を行なった。

第1は、本学院のよき伝統である「自由な校風の維持」である。自由を享受するためには、それ相応の自覚・良識に裏打ちされた規律が必要である。校則の少ない自由な校風を維持していくために、一人一人の生徒に対して、常に、本学院生としての自覚を持つことが求められている。

第2は「一人の人間として、互いに切磋琢磨すること」である。目標を高く据え、学識や徳行を深めていく。学識や徳行が深まれば深まるほど、その人柄や態度が謙虚になる。また、AIの台頭等によって職業環境が激変する中、将来に対する明確な目標を設定させる上でも、「キャリアデザイン講座」等のいわゆる「キャリア教育」のさらなる充実が求められている。

第3は「他者を思いやり、仲間・施設を大事にすること」である。いじめや中傷といった他者を傷つけることはあってはならない。他者に対して謙虚であれば、思いやりの気持ちも生じる。また、人間のみならず、環境、施設、身の周りの物を大切にすることは、感謝の心や、最終的には自尊感情を醸成することにもつながる。今日では、とりわけ、SNS利用に関わる問題事案が増加しており、その使用方法についても、一層の啓発が必要である。

4.2 2019年度の状況

まず、一つ目の重点目標である、「自由な校風の維持」については、概ね維持されているものと考えられる。しかし、三つ目の「他者を思いやり、仲間・施設を大切にすること」と関係することでもあるが、「自由」と「放埒」を履き違え、不適切な言動を行ってしまう例も散見された。そのような場合には、教務を中心とする教員による個別指導や、学期集会、LHRを利用した訓話等によって対応したが、今後とも、教員・生徒が一体となって、「自律」に裏打ちされた「自由」な学校体制の確立に努めたい。

二つ目の重点目標については、この目標を達成するためには、我々教員側が、本庄高等学院の最大の特長の一つが、受験のことを気にしないで自由に生徒の知的好奇心を刺激できることであることを常に意識

し、生徒の学問への意識を高める努力を継続することが肝要であると思われる。そのため、2019 年度においても、教員側も、自らの専門分野における研究をより深め、学問面における生徒からの要求に柔軟に対応し、それによって生徒の学院生としての矜持を高められるよう、努力を続けた。また、いわゆる「キャリア教育」についても、より効果的な方法を模索した一年であった。

最後に、三つ目の重点目標である、「他者を思いやり、仲間・施設を大事にすること」については、まず、ここ数年来の粘り強い指導による、校内美化の実現を成果としてあげたい。まだ、教室内への残置物が散見されることもあるが、確実に成果が見えてきているので、今後も継続して取り組んでいきたい。一方、上記の通り、他者への配慮を欠いた不適切な言動が発生する事案もあり、SNS 利用のことも含めて、今後とも粘り強く指導を続けていきたい。

5. 保健管理

5.1 保健室

(ア) 健康診断

4 月 18 日（木）に生徒定期健康診断を実施し、全生徒（留学中の者を除く）が受診した。要受診となった者には、精密検査、治療を促し、学業や部活等に集中できる環境づくりを支援している。

(イ) 保健教育

各学年に健康教育講演を実施した。

- ・ 第 1 学年：「こころの健康」6 月 6 日（木）
- ・ 第 2 学年：「デート DV とは」6 月 20 日（木）
- ・ 第 3 学年：「依存症の実態と予防」7 月 11 日（木）

(ウ) 課外講義

2019 年度も競技スポーツガイダンスと連携し、運動部員へ学院の救急体制について、また熱中症予防、インフルエンザ予防について周知することができた。その他運動部員対象の救急法講習会を実施し、100 名を超える生徒が救命入門コースを受講することができた。例年、教職員対象の救急法講習会も実施しているが、より多くの参加が見込めるよう、実施時期を検討したい。

(エ) 健康相談

また、医師による健康相談（眼科・耳鼻咽喉科・歯科・整形外科）を実施し、生徒、教職員の健康問題をサポートした。

(オ) 感染症対策

2019 年度はインフルエンザの罹患者数が少なく、地域での大きな流行もみられなかった。しかしながら、3 学期に入り、国内外で新型コロナウイルスの感染が拡大したことにより、通常時とは異なる出席停止措置、休校措置をとることとなった。今後も基本的な感染症予防の徹底に加え、個人の感染予防に関する意識を高め、学院内・寮内での感染拡大を食い止めたい。

（カ）カウンセリング

授業期間は毎週水曜日と土曜日の午後に、大学学生相談室のカウンセラー（臨床心理士）による相談を実施した。発達障害が疑われる生徒の相談は近年増加傾向で、大学の障がい学生支援室と連携して生徒の支援にあたり、学部へと引き継いでいく必要性がある。

5.2 共済見舞金

本学院では生徒の疾病・不慮の事故・災害等による医療費を相互扶助によって補助し、保護者の経済的負担を軽減することを目的に、独自の共済制度を設け、全生徒から年額 5,000 円を徴収している。15 年度から、より公平でわかりやすいシステムを目指し、現行制度の運用を開始した。これにより、本規程の所管箇所である早稲田大学学生部が大学生を対象に運営する学生健康増進互助会の基本的な考え方やルールに沿った医療給付制度となった。過去 5 年度分の支給実績は次頁の通りである。

年度	2015	2016	2017	2018	2019
支給人数（延べ）	608	770	791	916	891
支給人数（実数）	230	270	254	294	247
支給上限額（10 万円）到達者数	8	11	6	11	11
支給金額（円）	3,102,798	4,350,717	4,146,464	5,092,429	4,910,736

6. 安全管理

6.1 安全管理体制

キャンパスが本庄市と児玉町にまたがる浅見丘陵に位置し、その全域が大久保山遺跡であること、さらに自然保護問題の事情もあり、校門や塀がない。そうした都市部の学園とは大きく異なる環境の中で生徒の安全確保に取り組むため、教員日直制を設けている。

日直教員は、下校時刻の遵守のために生徒に帰宅指導をするだけでなく、校地巡回により不審者進入の未然防止に努めている。現実的で科学的な安全管理推進に向け、キャンパス管理室（運営は外部委託）を設置し、キャンパス内のセキュリティを強化している。警備員日中 6 名、夜間は 4 名による巡回・点検などマンパワー主体の業務に加え、最新テクノロジーを活用した防災・防犯・監視・入退出機器の設置により、24 時間監視体制と緊急時の出動体制を維持している。校舎内のセキュリティ機能は高いが、広大なキャンパスに点在する諸施設のセキュリティレベルをさらに向上させることが今後の課題である。

本庄キャンパス全体としては、労働安全衛生法第 19 条第 1 項に規定される安全衛生委員会が設置され、本庄プロジェクト推進室長を委員長に、本学院を含むキャンパス内各箇所から委員が選出されている。委員会は毎月定例で開催され、キャンパス内の安全衛生全般について報告や確認を行なっている。

14 年 2 月に埼玉県本庄警察署との相互連携に関する協定書を締結した。公立校と比較し地元の情報が入りにくい私立学校の特質上、警察と連携を図ることは、生徒の健全育成に資するだけでなく、地域との情報ネットワークを構築し、安全体制を強化するうえでも大きな意義があると考ええる。

東日本大震災の教訓を踏まえ、地元消防署と協力し、大地震発生を想定した防災訓練を 4 月 17 日に実施し、生徒の防災意識の高揚を図った。また生活の様々な場面で生徒が携帯電話等の情報機器を利用する機会が増加する中、違法・有害サイトへのアクセスによる犯罪に巻き込まれないよう、外部から講師を招

いて情報教育セミナーを行なった。

6.2 交通安全指導

4月10日(木)に、第1学年オリエンテーションの一環として、「交通安全講話」を実施した。本庄警察署員による講話で、主に自転車の安全走行と登下校中の防犯に関する内容であった。近年、自転車通学の生徒は減少しているが、自らが加害者にも被害者にもなりうることを具体例で示す内容で、生徒の受講態度も良く、交通安全への啓発を効果的に行なうことができた。尚、2014年度より講話の中で防犯に関する内容を扱いはじめ、19年度が6度目となる。

本校では年3回、各学期の開始あたりに教員が当番を組み担当ポイントを定め、生徒の登校指導を行っている。特に自転車通学者に対しては2017年度より、推奨通学経路を指定し、粘り強く指導を続けた結果、確実に定着し、今ではほぼ全ての生徒がその経路を通学するようになった。それにともなって、交通安全に関する意識も高揚し、イヤホン走行をする生徒も激減している。

7. 組織運営

7.1 入試

本庄学院では、世界並びに日本全土から多様な個性と文化的バックボーンを求めるべく、以下の6つのカテゴリで入試を実施している。

- ① 一般入試(募集:男子約100名、女子約70名)
- ② 帰国生入試(募集:男子約15名、女子約10名)
- ③ α選抜(自己推薦)(募集:男子約45名、女子約30名)
- ④ I選抜(帰国生自己推薦)(募集:男女約20名)
- ⑤ 指定校推薦
- ⑥ 地元推薦

(ア) 志願者数、入寮者数等

- ・ 志願者総数3,306名、前年度比+227名。一般・帰国生入試で、2次試験(面接)を廃止したことにより特に東京都、神奈川県志願者が増加した。帰国生入試でも増加した。
- ・ 入学予定者数329名。男子176名(53.5%)、女子153名(46.5%)。
- ・ α選抜では、男女とも志願者が減少したが(計-70名)、いずれも2017・2018年度と同水準であった。昨年度の高倍率からの揺り戻しとみることができる。
- ・ I選抜の志願者数がはじめて3桁に達した。男子は5年間ほぼ同数で、女子の増加が顕著である。
- ・ 本年度よりWEB出願システムを導入し、入試要項の販売をとりやめた。
- ・ 入寮者数を増やすべく広報活動で力点を置き、各種媒体に加えて、学院説明会での見学会を昨年度に続き実施した。入寮予定者は早苗寮46名、梓寮39名で、それぞれの部屋数の約1/3に達した。
- ・ 帰国生入試・I選抜を合わせた志願者数は402名(+72)。帰国生入試の定員増(2017年度)、帰国生認定の要件緩和(2018年度)もあって、両入試区分とも増加傾向が続いている。

(イ) 説明会

- ・ 本庄高等学院主催学院説明会：7月・9月・11月の3日間、計6回開催した。
- ・ 寮見学会：学院説明会の3日間、昨年に引き続き寮見学会を実施した。申込件数（3回合計）は早苗寮 748(+75)、梓寮 462(+60)と、受験生・保護者の関心の一層の高まりがうかがえた。
- ・ 各種説明会と個別相談：海外2コース(13都市)、早大附属・系属7校合同説明会(6/30)、JOES主催の地方説明会(大阪・名古屋)、出版社・学習塾など主催の説明会・相談会(23会場 26日間)に参加した。学院での説明会を含めた個別相談件数は、男子 621(−142)、女子 588(+30)。
- ・ 海外在住者向け学院見学会：入試期間、土日祝日、行事日を除いて海外在住者の案内を随時行った。組数は 191(+9)。この春季休業中は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため実施を見合わせた。
- ・ 地元指定校向け説明会等：学院の教育内容や求める生徒像等を伝えるため、中学生・保護者・教員を対象に本学院での説明会をはじめて実施した(9月)。また、求めに応じ出前講義も行った(夏季休業中)。

(ウ) 入試実施体制

- ・ WEB 出願システムを導入し、「入学試験要項」の販売をとりやめ、PDF データをウェブサイトで公開する方式とした。これにともない α 選抜「活動記録報告書」などの書式を変更した（サイズも A3 から A4 に変更）。
- ・ 昨年度、自己推薦入試の合格者のうち入学しなかった者が2名いたことを受け、調査書の文言を「早稲田大学本庄高等学院を第一志望とし、合格した場合は入学を確約できる者である」とより厳格に変更した。今年度は、推薦入試（地元・指定校含む）の合格者全員が入学予定である。

(エ) 入試・選抜（カテゴリ別）

1) 指定校推薦

- ・ 一般指定校：入学者は男子 10 名、女子 16 名（指定 28 校中）。
- ・ 地元指定校：入学者は男子 7 名、女子 8 名。

2) I 選抜

- ・ 志願者数 107 名。合格 23 名。

3) α 選抜

- ・ 男女ともに志願者が減少し男子 109 名、女子 177 名となったが、2017・2018 年度と同水準であった。

4) 一般入試・帰国生入試

- ・ 一般男子 92 名、一般女子 68 名、帰国男子 15 名、帰国女子 13 名

(オ) 2021 年度入試へ向けて

一般・帰国生入試では、今年度の実績を踏まえて、歩留りの予測を精緻化することがもとめられる。昨年度までは、1 次合格発表から 2 次選考までの数日間に諸データを整備することが可能であったが、今年

度からはこの時間的余裕が乏しくなっている。また、合格発表日が競合他校より早くなったため、辞退者数の推移にもあらためて一層の留意が必要である。

（カ）入学決定者の集い

例年、入試後の入学手続きの後の土曜日に、手続き者を集めて「入学決定者の集い」を行なっている。これは、「早稲田大学本庄高等学院に入学する」というモチベーションを高めるとともに、具体的に入学式までにやっておくべき課題等や入学後のプログラムを説明して不安を少しでも解消することを目的として例年実施している。アンケート結果を見るに、概ねその目的は達成されている。

20年度入試後の入学決定者の集い参加者数は全体295名（男子：170名、女子：125名）だった。

7.2 奨学金

学内奨学金の募集は、春と秋の年2回行ない、学外奨学金の案内も含め、LHRや本学院のホームページを通じて生徒へ広く周知している。奨学金のうち学内奨学金を受給している生徒は、春季募集16名、秋季募集13名の合計29名であった。いわゆる「家計点」が高い、すなわち経済的に困窮度の高い家庭が多い傾向は変わっていない。

学外奨学金の状況は既掲の通りである。受給者の合計は32名であり、学内奨学金と同様、経済的に厳しい状況が反映されている。

また、埼玉県授業料等軽減補助金は88名、埼玉県在住者を対象にした奨学のための給付金等を受けている者は13名であった。さらに国の制度である就学支援金受給者は第1学年166名、第2学年150名、第3学年165名で、合計481名となっている。

奨学金名、奨学生数
日本学生支援機構奨学金（学部進学後の至急予約）26
地方公共団体奨学金（埼玉県） 3
民間団体奨学金 3

7.3 生徒進路

19年度は334名が早稲田大学各学部へ進学した。各学部・学科・専攻・専修（基幹理工学部は学系）毎の男女別の進学者数は以下の通りである。

学部	学科	進学者数（計/男/女）
政治経済	政治	25／ 8／ 17
	経済	32／ 19／ 13
	国際政経	16／ 6／ 10
法		44／ 28／ 16
文化構想	文化構想	24／ 8／ 16
文	文	13／ 5／ 8
教育	教育	6／ 3／ 3
	国語国文	4／ 2／ 2
	英語英文	4／ 3／ 1

	社会	8 / 7 / 1
	理学	3 / 2 / 1
	数	1 / 1 / 0
	複合文化	4 / 3 / 1
商		32 / 17 / 15
基幹理工		31 / 30 / 1
創造理工		26 / 17 / 9
先進理工		20 / 12 / 8
社会科学	社会科	19 / 10 / 9
	TAISI	1 / 1 / 0
人間科学		5 / 2 / 3
スポーツ科学		3 / 1 / 2
国際教養		13 / 6 / 7
合計		334 / 191 / 143

19年度卒業決定者のうち、早稲田大学推薦辞退者（他大学受験希望者）は2名だった。

7.4 組織

7.4.1 委員会

19年度はそれ以前の委員会活動の反省を含め、大幅な改編・統廃合を行なった。校務分掌のスリム化、教員の業務量の軽減化を目指した。統合の他、施設検討委員会、情報管理運営委員会、募金委員会は廃止した。以下に、各委員会の検討事項及び取り組みを紹介する。

委員会	業務
教科主任会	予算関係、カリキュラム・成績・進級・進学関連、および教科・学校の教務関連の内容を主として扱う。図書委員会を包含している。
学年主任会	奨学生の選考、生徒表彰の選考
生徒活動支援委員会・人権教育委員会（生徒会・稲稜祭・生徒指導、いじめ防止委員会（いじめ事案が発生した場合）	<p>日常の生活指導、学校における安全・安心確保への取り組み、稲稜祭（文化祭）開催、問題行動が発生した際の事実確認と生活指導計画の立案と実施、及び外部有識者による教員研修実施</p> <p>生徒指導委員会、人権教育委員会の旧来の生徒活動に関わる委員会を統合し、そこにそれまで生徒担当教務の職務だった生徒会・稲稜祭に関わる業務を含めた。人数を拡大しながら、生徒指導業務を半期交代にし、業務軽減を狙った。</p>
寮委員会	生徒寮の生活指導、寮規則の検討

安全委員会	旧来の学校行事運営委員会を母体として、加えて保健、その他安全配慮を目的として新しく作った。
広報・出版委員会	研究紀要の原稿依頼・編集
入試委員会	『学院案内』の入試部分の作成、指定校の決定、学校説明会における個別相談の実施、各種入試説明会への参加、入学試験要項の作成等
施設検討委員会	新体育館フロアーの具体的計画の検討
進路指導委員会	「秋のキャリアデザインウィーク」の立案及び実施、卒業論文報告会の準備及び実施、学部説明会の検討、卒業論文の評価や手引書の改訂、提出時期等の検討
SSH 検討委員会	SSH 事業の立案及び実施、課外講義の実施、各種コンテスト・調査旅行への生徒引率、SSH 成果報告会の立案及び実施、文部科学省への SSH 再申請
SGH 委員会	SGH 立案及び実施、生徒 SGH の組織運営、各種交流事業や調査旅行への生徒引率、SGH 報告会の立案及び実施、文部科学省への年度末報告、SGH 報告書作成
留学・海外交流委員会	今までの国内外交流委員会を改組し、留学の要素を加える
学校評価運営委員会	学校評価の立案、実施依頼、報告書の作成

7.4.2 教科別構成

教員の教科別・年齢別・男女別構成は次の表の通りである。前年度から専任教諭は1名増となった。

(ア) 教科別構成

教員の教科別・年齢別・男女別構成は次の表の通りである。

教科	専任教諭	非常勤講師	合計
国語科	6	6	12
地理歴史公民科	7	15	22
理科	6	7	13
数学科	7	4	11
保健体育科	5	5	10
芸術科	1	2	3
英語科	9	10	19
情報科	1	3	4
家庭科	1	1	2

第二外国語	0	4	4
養護	1	0	1
合計	44	57	101

(イ) 年齢別構成

資格	人数	21～30 歳	31～40 歳	41～50 歳	51～60 歳	61～70 歳
専任教諭	44	3	13	15	7	6
非常勤講師	57	25	8	6	7	11
全体	101	28	21	21	14	17

(ウ) 男女別構成

資格	合計	男	女
専任教諭	44	35	9
非常勤講師	57	43	14
合計	101	78	23

(エ) 教員の授業担当時間

19 年度の教員の平均授業担当時間数は次の通りである。18 年度から大きな変動はない。

1. 専任教員 14.1 時間（除長期欠勤者・特別研究期間適用者・養護教諭）
2. 役職者以外 15.0 時間
3. 役職者（教務） 7.8 時間
4. 非常勤講師 6.7 時間

(オ) 事務組織

専任職員および嘱託の嘱任・解任および配置転換は大学が行ない、派遣スタッフについては、大学が契約窓口となり人材サービス会社から派遣されている。なお図書室は、16 年度より業務委託となっている。

(カ) 教諭会

19 年度は定例教諭会が 11 回（入試判定会、卒業・進級判定会は除く）、臨時教諭会が 22 回開催された。18 年度に比して臨時教諭会の回数が大幅に増えたのは、新型コロナウイルスへの対応のためである（3 月中旬以降は感染に配慮し Zoom による TV 会議で実施）。なお、臨時教諭会には生徒指導を議題とする会議が複数回含まれる。

7.5 勤務時間管理

本校の勤務体制は、小中高等学校では珍しい変形労働時間制である。自分の授業や校務分掌、部活動指導を考えながら、通勤時間を自分で決められる。

一方で、一般的に学校現場における問題であるが、採点や成績業務については答案を持ち帰ることがしにくいため、どうしても勤務が夜遅くまでになる傾向がある。

また、部活動に関しては、休業日の指導、あるいは引率が発生する。文科省や県のガイドラインが 2019 年度に発表されていることもあり、本校も 2020 年度には「働き方改革」の 1 つとして検討を始めたいと考えている。

7.6 情報管理

早稲田大学オープンソースソフトウェア研究所が開発した学院向け教務システム「SchoolN@vi」を導入している。同システムはリレーショナルデータベース化による情報の一元管理を特長とし、高度なセキュリティ保持や容易なデータ抽出・加工が可能になった。ユーザーインターフェースとしてウェブブラウザが採用されていることも、操作性や利便性の向上に役立っており、特に教員についてはデータの閲覧・編集がインターネット環境さえ整えばどこからでも可能になっている。

今後は、生徒の保健管理や課外活動管理などシステム化されていない事項を含め、ユーザーの希望を取り入れながらシステムの改善に取り組みたい。

具体的な運用は以下の通りである。

- ・ 出欠席管理：科目担当者（教員）が毎時限の出欠席を入力した後、学期毎に組主任が欠席理由、成績通知表用所見を入力する。その他、学校行事など出欠席の一括入力が必要となる例外対応や集計処理は職員が管理する。
- ・ 成績管理：科目担当者が生徒の成績を入力した後、チェックから確定処理までを教員が行なう。成績通知表・指導要録・調査書等の成績関連帳票の自動出力が可能となっている。進学学部への調査書提出時など一括処理やデータ集計が必要な部分については、職員が編集・管理を行なっている。

7.7 教員の活動

7.7.1 研究活動

（ア）特別研究期間

2 名の教員が特別研究期間の制度を活用し、1 年間研究に従事した。

（イ）研究紀要

本学院専任教員、非常勤講師等が執筆した研究論文や調査報告を掲載し、年 1 回刊行している。19 年度は第 38 号を刊行し、論文 7 本を収録した。うち、1 本が中文によるものであった。なお、今号は退職される佐々木教諭に向けて、「佐々木幹雄先生古稀記念号」とした。

（ウ）教員の研究成果

早稲田大学本庄高等学院専任教諭は、個人研究費を支給されるほか、本年度は科学研究費（奨励研究）2 件、早稲田大学特定課題研究費（新任の教員）2 件、同（基礎助成）6 件、同（特定課題 B）5 件、早稲田大学教育総合研究所の研究助成（兼任研究員 2 名）を受給している。これを受けて、活発な研究活動が展開されている。本学専任教員の研究成果は多岐に及ぶが、以下、申告のあったものについて、列記し、紹介する。

著書

- ・ 齋藤正憲『呪術師のいる風景』（単著）、東京図書出版
- ・ 影森徹（共著） 比教科書有趣的 14 個科学実験 I 東販出版（台湾）中国語 2019. 7. 1
- ・ 影森徹（監修） 動く図鑑 MOVE「科学のふしぎ」 講談社 2019. 11. 19
- ・ 細喜朗「第 4 章 1. 「異文化理解」授業の振り返り（高校）」、『「教師の自己評価」で英語授業は変わる～J-POSTEL を活用した授業実践』大修館書店、235 頁、執筆担当箇所 152-160 頁、2020 年 3 月（分担者）

論文・研究ノート

- ・ 赤塚祐哉“Awareness of Critical Thinking Attitudes and English Language Skills: The Effects of Questions Involving Higher-order Thinking”, *Journal of Pan-Pacific Association of Applied Linguistics*, Vol. 23 No. 2, pp. 59-84, 2019 年 12 月
- ・ 齋藤正憲「浅見五郎助になるということ」（単著）『古代』145, 205-217（2019）.
- ・ 齋藤正憲「浅見五郎助、つくる」（単著）佐々木達夫（編）『中近世陶磁器の考古学』第 11 巻, 雄山閣, 307-320（2019）.
- ・ 齋藤正憲「童乩と扶鸞：台湾のシャーマニズム」（単著）『埼玉学園大学紀要』19, 39-51（2020）.
- ・ 齋藤正憲「古代エジプト神話の構造」吉村作治（編）『オシリスへの贈物：エジプト考古学の最前線』, 雄山閣, 71-79（2020 年）.
- ・ 齋藤正憲「死者を悼み、生者を扶く：スリランカの呪術師」（単著）『早稲田大学教職大学院紀要』12, 1-15（2020）.
- ・ 齋藤正憲「乩童與扶鸞：臺灣民間信仰的實地調査記録」（鈴木勝陽との共著、第一著者）『教育と研究』38, 35-45（2020 年）.
- ・ 成瀬政光「高等学校数学科にて深い学びを促すためのアクティブラーニング教材に関する研究・実践：高大一貫私立高校にて文系学部志望の生徒に対する大学接続を意識した数学教材の開発」, 『日本私学教育研究所紀要』55.
- ・ 望月 眞帆 「『発表技術』の学習と実践 ―教室と特別活動の循環を目指して」『学習情報』vol. 273 pp. 44-45. 2020 年 2 月
- ・ 細喜朗「高校における三角ロジックを利用した思考力向上を目指す指導の提案―新学習指導要領に基づいて―」『「英検」研究助成 報告』第 31 巻 , pp. 94-111, 2020 年 1 月

口頭発表

- ・ Yuya Akatsuka, “The Procurement of Critical Thinking Skills and Foreign Language Acquisition: Applying to the Teaching Approaches of Paul’ s Critical Thinking Concepts”, *The 24th Conference of Pan-Pacific Association of Applied Linguistics*, Seoul, Korea, 20 August 2019.
- ・ 赤塚祐哉『批判的思考力と英語運用能力を育成する教育方法の有効性―国際バカロレア教育を切り口として―』日本教育方法学会第 55 回大会、東海学園大学、2019 年 9 月 29 日
- ・ 齋藤正憲「メーニョとサーミ：スリランカの呪術師」『日本西アジア考古学会第 24 回総会・大会要

旨集』，21-22（2019.6.16）。

- ・ 齋藤正憲「童乩と扶鸞：台湾の呪術実践」（単独，2019 年度東南アジア考古学会総会・研究大会、2019.11.16、於：早稲田大学戸山キャンパス 33 号館 331 教室）。
- ・ 齋藤正憲「信仰の深淵：台湾原住民の女性呪術師」（単独，第 271 回東南アジア考古学会例会（2019 年度調査報告会）、2020.3.10、於：早稲田大学戸山キャンパス 33 号館第 10 会議室）。
- ・ 成瀬政光「帰納的推論を通じた深い学びを促す実践：「好い加減の知」を意味づけする活動の設計」．日本数学教育学会第 101 回全国算数・数学教育研究（沖縄）大会，2019 年 8 月 8 日．
- ・ 成瀬政光「数理科学を志向した理科・数学間の連携授業の開発」．早稲田大学教育総合研究所第 25 回公開研究発表会，2020 年 1 月 25 日．
- ・ Yoshio HOSO, “Using the argument model in high school essay-writing instruction to improve students’ thinking abilities”, *The 17th AsiaTEFL International Conference, Bangkok, Thailand, 29th June 2019.*
- ・ 細喜朗『新学習指導要領に基づく CLIL 授業の実践』関東甲信越英語教育学会，2019 年 08 月 11 日
- ・ 細喜朗『高校における論証モデルを利用したライティング指導の評価』全国英語教育学会，2019 年 08 月 17 日

7.7.2 社会活動

学会役員

- ・ 魏晋南北朝史研究会監事
- ・ 有島武郎研究会幹事・編集委員
- ・ 早稲田大学国語教育学会事務局委員
- ・ 日本英語教育学会・編集委員
- ・ 日本国際バカロレア教育学会・理事/大会組織委員長
- ・ 田辺英語教育研究会（TALK）・研究企画委員
- ・ 日本西アジア考古学会総務担当役員
- ・ 早稲田大学考古学会評議員・編集委員
- ・ ATEM(映像メディア英語教育学会)専務理事(会員管理担当)

学外委員

- ・ 本庄市行政不服審査会委員

学外講師・出張授業等

- ・ 上里町賀美公民館文学講座『恋歌の系譜』
- ・ 本庄市民総合大学講師
- ・ 子ども大学本庄副学長
- ・ 筑波大学大学院教育研究科教育学（国際教育）修士プログラム科目「日本の教育：政策・理念・実践」特別講師

その他

- ・ おおくぼ山スポーツクラブ代表
- ・ 日本英語検定協会英検面接委員
- ・ 日本英語検定協会 T E A P 面接委員
- ・ 埼玉県高等学校体育連盟サッカー専門部常任委員
- ・ 埼玉県高等学校体育連盟陸上競技専門部常任委員
- ・ 埼玉県高等学校体育連盟ラグビー専門部専門委員（北部地区副委員長）
- ・ NHK ラジオ高校講座「コミュニケーション英語 II」講師
- ・ 東京書籍 外国語検定教科書（新規発行）編集協力者
- ・ 文部科学省国際バカロレア (IB) 教育推進コンソーシアム研究プロジェクト「日本における国際バカロレア教育の効果に関する研究」共同研究者

7.7.3 教科書等の執筆

- ・ 『国語総合』東京書籍
- ・ 『精選国語総合』東京書籍
- ・ 『新編国語総合』東京書籍
- ・ 『古典B』東京書籍
- ・ 『精選古典B』東京書籍
- ・ 『新編古典B』東京書籍
- ・ 『古典A』東京書籍
- ・ 『情報の科学』日本文教出版
- ・ 『All Aboard! Communication English I, II』東京書籍
- ・ 『New Discovery English Communication III』開隆堂
- ・ 『物理基礎』実教出版

7.8 外部資金の導入

- ・ SGH（スーパーグローバルハイスクール） 3,700 千円
- ・ さくらサイエンスプラン（科学技術振興機構）
アジアの学生を日本に招聘し、日本の科学技術体験と国際交流を目的とする事業
Mahidol Wittayanusorn School (Thailand) 受け入れ資金 3,000 千円
- ・ 一般財団法人日本私学教育研究所平成 30 年度委託研究費「高等学校数学科にて深い学びを促すためのアクティブラーニング教材に関する研究・実践」200 千円
- ・ 令和元年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）（奨励研究）課題番号 19H00066「キャンパスの自然環境を活用した気象環境調査の教材化」440 千円
- ・ 科学研究費、奨励研究（課題番号 19H00036）（配分額 540 千円（直接経費:540 千円））「高次思考の問いを中心とした授業での言語運用力と批判的思考力の有効性に関する研究」
- ・ 公益財団法人 日本英語検定協会制度名:第 31 回「英検」研究助成実施形態:研究助成金「高校における三角ロジックを利用した思考力向上を目指す指導の提案～新学習指導要領に基づいて～」2018 年

07 月-

- ・ 公益財団法人武田科学振興財団 2019 年度中学校・高等学校理科教育振興助成「高校生による宇宙線のハイブリッド型同時測定」300 千円

7.9 募金

19 年度の教育振興資金寄付件数は 72 件、寄付金額は 14,150,000 円であり、その他にも本庄高等学院指定寄付や部活動指定寄付を 10 件、2,170,010 円を受け入れた。今後も引き続き、さらなる募金獲得に向けて今まで以上に幅広く活動を行なう必要がある。

7.10 大学教育との連携

本庄高等学院は早稲田大学の附属校であるため、大学との連携プログラムが多い。

（ア）教育実習

2019 年度は 2 週間：5 月 20 日（月）～5 月 30 日（木）、および 3 週間：5 月 20 日（月）～6 月 5 日（水）に実施。

※ 保健体育の教育実習期間：5 月 27 日（月）～6 月 13 日（木）に 15 名の実習生を受け入れた。実習前の打ち合わせ会は従来の日程である 5 月 9 日（木）に行った。実習生は教壇実習および体育祭の運営や部活動指導にも参加し、学校現場の業務の体験に努めた。教育実習の反省会は 2 週間および 3 週間の実習最終日にそれぞれ実施した。

（イ）競技スポーツガイダンス

2015 年 2 月に実施された「コーチサミット（競技スポーツセンター主催）」に参加の際「高大一環」を村岡担当理事がコメントしたことをきっかけに「高大連携」「競技力向上・育成」を目的とし、各運動部共通のテーマによる講演を実施した。

2019 年度は 2 回実施した。各回のテーマは次の通りである。

- ・ 第 15 回 「運動部員のための基礎栄養学」
- ・ 第 16 回 「早稲田大学体育各部の取り組み紹介」「リハビリ実践」

その他、健康、安全管理の観点から、運動部を対象に「熱中症対策講座」「AED 講習」「インフルエンザ対策講座」も実施した。

（ウ）学部・大学院の授業担当

学院長の承認を得て、学部・大学院等でも授業を担当している教員がいる。授業担当状況は次の通りである。

- ・ 文学学術院 1 名
- ・ 教育・総合科学学術院 1 名
- ・ 大学院教育学研究科高度教職実践専攻（教職大学院） 1 名
- ・ 人間科学学術院 1 名
- ・ スポーツ科学学術院 1 名

なお、早稲田大学以外でも教育・研究活動に参加している教員がいる（埼玉学園大学人間学部非常勤講師、東日本国際大学客員准教授、文教大学国際学部非常勤講師、明治大学サービス創新研究所客員研究員、高崎経済大学経済学部非常勤講師）。

8. 研修および交流活動（資質向上の取り組み）

8.1 修学旅行

授業時間の確保のため、18年度からは日程が1日分短縮されており、10月14日（月・祝）から18日（金）までの4泊5日で実施した。生徒は各自の希望により3コースに分かれ、結果として参加者数は、

- ・ 北京コース 85名（男子 63名・女子 22名）
- ・ 韓国コース 77名（男子 33名・女子 44名）
- ・ 台湾コース 141名（男子 68名・女子 73名）

となった。不参加者は34名（男子 28名・女子 6名）であった。

北京コースでは、天安門広場、万里の長城、天壇公園、北京大学構内などにて研修を行い、10月16日に北京大学附属中学との交流を行った。韓国コースでは、ソウルタワー、統一展望台、自由の橋、水原、戦争博物館にて研修し、また10月17日に安養外国語学校との交流を行った。台湾コースでは、九份、十分、忠烈祠、故宫博物院にて研修し、10月16日に台中一中との交流を行った。

すべてのコースで班別自由行動が設定されており、生徒たちは事前に調査した行程で自主研修を行った。

第3学年団では修学旅行の目標を「人から学び、土地から学び、集団行動から学ぶ」と設定し、事前学習から修学旅行実施、事後学習までを展開した。事後アンケートを見ても、実際に現地に赴き、土地に触れ、人に触れることで、これまでの自身の意識を改めるきっかけになった生徒が多いことがわかる。

一方で、状況が変わってゆく中で事前学習を計画・実施していくことの難しさを感じた。また、台風の影響を強く受けたことも否めない。今後も生徒の安全を第一に考え、学びの多い修学旅行のあり方を考えていく必要がある。

8.2 国内研修

（ア）国立天文台（三鷹キャンパス）の見学

8月30日（金）に国立天文台三鷹キャンパスを訪問し、全学年希望者13名が各施設を見学した。また、国立天文台の最先端研究テーマなどについて、赤外線位置天文観測衛星（JASMINE）プロジェクト長郷田直輝教授、先端技術センター鶴澤佳徳教授、先端技術センター早野裕氏による解説を受けた。

展示室、プラネタリウム（4D2U ドームシアター）、大型低温重力波望遠鏡（KAGRA）のベースとなったTAMA300、先端技術センターのALMA望遠鏡等に使われている電波受信機の組み立て現場等を見学した。

（イ）小笠原研修

この研修は06年に開始し、19年度で13回目を数える（途中1回台風のため中止）。今年は8月26日（月）～31日（土）の日程で実施した。当初は、オガサワラグワを中心とした母島の希少植物観察を中心とした研修であったが、お世話になっている母島へのお礼を考え、11年から母島子供科学教室を開催している。当初は参加児童も少なく3人の年もあったが、地域に認識されてきたのか、年々参加者が増え

ている。会を重ねるごとに、母島観光協会との連携が深まり、密度の高い研修活動に近づいていると言える。

今年度は特に、母島に於いて観光協会並びに環境庁のご協力を得、小笠原の自然環境に関する固有種・在来種に関する密度の高いワークショップを実施することが出来た。予定したプログラムを滞りなく実施でき、参加生徒にとっては収穫の多い研修となった。

(ウ) Japan Super Science Fair (JSSF) 2019

11月14日(金)～11月7日(木)に立命館高等学校が主催した大規模な国際高校生科学フェア JSSF に生徒4名が参加し、研究発表・課題コンペ・講義・遠足・文化交流等を行なった。うち2名はNJCとの共同研究発表を行なった。

8.3 国際交流活動 (SGH 活動以外)

(ア) MWIT の来校 (4月18日(木)～4月25日(木))

タイの Mahidol Wittayanusorn School (MWIT) の生徒10名教員2名が本庄学院を訪問し、学院生と科学交流(授業参加、博物館・企業見学、大学訪問等)を行なった。MWITS はシンガポールの NJC と並んで本庄学院との交流の長い学校で、その歴史は 2005 年に始まっている。

今回のプログラムは、JST のさくらサイエンスプランの支援のもと、実施している。

(イ) NJC の来校 (10月28日(月)～11月2日(土))

2007 年度より開始された、双方の学校を訪問するこの交流プログラムは今年度で 13 回目になる。

女子生徒9名教員2名が本庄学院を訪問した。企業見学、共同研究、歓迎お茶会、河川調査などを行った。うち3名の生徒、1名の教員は11月2日に本庄学院生徒4名と共に京都の立命館高校で開催される Japan Super Science Fair 2019 に参加した。

(ウ) Singapore National Junior College (NJC) との交流活動

7月17日(水)～7月25日(木)に生徒7名をシンガポール National Junior College に派遣し、校内外における様々なプログラムを実施した。交流の軸は共同研究であり、3つのテーマについて実験・ディスカッションを行なった。

(エ) Mahidol Science Fair 2020 (MSF) および Mahidol Wittayanusorn School (MWIT) との交流活動

2020 年 1 月 30 日(木)～2 月 7 日(金)の日程で生徒10名が MWIT を訪問し、科学交流・授業交流・文化交流を行なった。その間、1 月 31 日～2 月 1 日に開催された、タイの科学教育校を対象とした MSF に、同時期参加していたオーストラリアの高校、日本の高校と共に参加し研究発表・ポスター発表・課題コンペを行なった。

8.4 SGH (スーパーグローバルハイスクール)

8.4.1 研究開発の概要

「国際共生のためのパートナーシップ構築力育成プログラム」の開発研究を目標として 2015 年度に指

定を受けた。研究構想では「グローバル人材」を、国際共生のためのパートナーシップ構築力に必要な資質を備えた人材と定義し、その資質を涵養する教育プログラムの開発を目的に事業を展開した。研究開発のアプローチとしては、授業および課外活動において、少人数のチームメンバーが互いに異なる資質を発揮し合いながら特定の目標に向かって取り組む「マイクロプロジェクト」をシラバスや教育プログラムに組み込むことで、関わった生徒全員が当事者意識をもって取り組めることを念頭においた。

今年度は SGH 指定期間最終年度となり、過去 4 カ年に開発してきたプログラムを SGH 指定期間終了後も継続させるための検討と準備を進めた。その中核となったのは 10 月 30 日～11 月 2 日にかけて実施した国際学術交流企画「Academic Exchange Week (AEW)」である。昨年度に開催した国際高校生学会「Waseda International Symposium on Education and Culture (WaISEC)」において得られた成果をもとに、生徒自身による主体的な学びの場の創造を支援し、全校生徒と学術交流パートナーに開かれたグローバルな学びのプラットフォーム作りと国際協働学習のモデル化を進めた。

全校生徒対象に毎年 1 回実施している SGH 定点調査等による検証からは、多様な人々が集うコミュニティを肯定的にとらえる傾向が強まり、海外事情への関心も高まったことが推測される。国際学習交流の振り返りでは「交流を経験した」だけでなく、交流相手との密な意見交換の機会を求める気運が育った。学術論文を執筆するための学年ごとの指導法の実践研究や教科横断型や異学年連携の授業が増加し、その教育効果も確認することができた。「ポスターセッション」は生徒と教職員間に理解が定着し、授業内でも活用が進んだ。

学校外の組織等との連携も進み、ソウル国際高校との通年オンライン授業、早稲田大学高等学院およびハナ高校との協力で開始した短期交換留学、稲稜祭でのネパール人権擁護活動支援、本庄市内の教育支援ボランティアなど活動が広がっている。

8.4.2 SGH 研究課題の授業内での展開

(ア) 第 3 学年「総合的学習の時間」、および第 2 学年「LHR」での卒業論文製作一斉指導

早稲田大学グローバルエデュケーションセンター(GEC)の協力により、ライティングセンター教授陣による特別講義を年間計 4 回実施した。3 年生対象の 3 回の連続指導は「総合的学習の時間」の年間シラバスに基づき 4 月 25 日、6 月 25 日、9 月 12 日に実施した。2 年生対象には 9 月 12 日の LHR の時間を学年集会として実施した。また、進路指導委員会で卒業論文優秀作品の学内公開に向けた検討を進め、2019 年度末に最初の優秀作品集を編纂した。

(イ) 第 1・2 学年英語授業内での SGH 課題の展開

第 1 学年では「英語表現Ⅰ」2 単位のうち 1 単位を SGH 科目とし、習熟度別の少人数授業を実施した。この時間は発信能力（話すこと・書くこと）に特に焦点をあて、「高次の思考力」を高める双方向的な授業を展開した。2 学期には「食と生活・食と社会」をテーマとして「家庭基礎」との教科横断型授業を実施した。

2 学年では「コミュニケーション英語Ⅱ」4 単位のうち 1 単位を SGH 科目とし、SGH の目標実現に必要な内容を教科横断的な視点で組み立てた授業を行った。ポスターを使用したプレゼンテーションを効果的に行うため情報科と連携した。また、「政治・経済」の授業と連携し、アカデミックライティングの基礎指導、言語運用能力の向上のための指導、アカデミックプレゼンテーション・ポスターセッションの演

習、英語論文の作成支援を行った。

（ウ）第2学年および第3学年選択科目授業内でのSGH課題の展開

2年次必修科目「政治・経済」においてソウル国際高校との協働研究を実施した。選抜された30名の生徒が10のチームに分かれて韓国の同数のパートナー生徒とともにSDGsをテーマとしたグループ研究とポスター・英語論文を作成し、授業内での中間報告とディスカッションを経てSGH成果報告会で発表した。また、代表6名が8月5日～8日に韓国を訪問し、ソウル国際高校でフォーラムを開催した。英語科との連携を継続した。第3学年選択科目の6つ「Academic English (Advanced Discussion)」では、「SGH学術交流ウィーク」の一環としてシンガポールの交流校の生徒6名が授業に参加し、日本社会や文化の特色について集中討論を行った。

（エ）各研究課題における国内外生徒派遣と成果の普及

夏期の国内外フィールドワークを核とした課題探究活動を継続し、発展させた。SGHの夏季フィールドワーク（以下FW）への参加は1人1か所という条件を提示した上で全校生徒を対象に公募し、コーディネーター教員が研究課題の趣旨に応じた選考方法で参加者を決定した。国内外FW・シンポジウム参加は34名（うち海外派遣は28名）となった。研究成果は「稲稜祭」および「SGH成果報告会」で学内外に発表した。

＜ソウルFW（研究課題A-1「グローバル社会と人権」教材開発）＞

2年次必修科目「政治・経済」で実施したソウル国際高校とのSDGsをテーマとしたオンライン協働グループ研究の代表6名が8月5日～8日に韓国を訪問し、ソウル国際高校主催のフォーラム「第二次日韓高校生共同学術交流サマーキャンプ」に参加し、5本の共同発表を行った。

＜上海・蘇州FW（研究課題A-3「世界文化遺産」紡績業を軸にした教科横断型授業の開発）＞

過去3か年の研究成果を踏まえた6回の事前学習会を経て、生徒4名と引率者2名による上海・蘇州における現地調査と江蘇省蘇州中学との学術交流を実施した。7月27日～8月1日の上海・蘇州FWには蘇州中学での合同研究発表会（「蘇州中学・日本本庄高中 学術交流会」）やパートナー校生徒宅でのホームステイも組み込まれた。研究成果はポスター・レポートにまとめ、稲稜祭および「SGH成果報告会」で学内外に発表した。

＜シンガポールFWと来校交流（研究課題B-1 インバウンド観光プランの考案・実行と相互評価）＞

生徒5名（引率者1名）が参加し、シンガポール・National Junior College (NJC) の生徒6名と共同調査・研究を行った。今年度のテーマは「シンガポールおよび日本に短期滞在する外国人観光客によるソーシャルメディアでの発信内容が観光業に与える影響の考察」とした。相手校生徒との1学期に3回のSkype会議を含む事前学習、文献調査、シンガポールを訪問してのディスカッションと街頭取材（7月16日～20日）、AEW期間の日本国内での街頭取材と発表準備（10月28日～11月2日）を学習の主軸とした。生徒の研究成果は「International Humanities Symposium 2019 in National Junior College」(7月19日、NJC)、「教育の国際化研究会 2019年度第1回研究会」(10月30日、早稲田大学)、11月2日の「SGH成果報

告会「生徒発表の部」で英語で共同口頭発表を行った。

＜ジョグジャカルタ FW と来校交流（研究課題 B-3 相互訪問とオンライン交流で進める発信型プロジェクトの開発）＞

夏のジョグジャカルタ FW と秋の本学院での国際学術交流を核とした通年のテーマ型協働学習のシラバス開発を目標とし、生徒 5 名（引率者 1 名）がジョグジャカルタ市の生徒 6 名と「相互支援と自立」について協働研究を実施した。8 月 26 日～30 日のジョグジャカルタ FW では、ホスト校 SMA N2 Yogyakarta 訪問や地元市民 8 名へのインタビュー等を行い、成果を稲稜祭および「SGH 成果報告会」で発表した。10 月 29 日～11 月 4 日の「SGH 学術交流ウィーク」にパートナーを招聘し、最終日の「SGH 成果報告会 生徒発表の部」では在校生と共に、一連の国際協働学習交流の経験からの「持続的なパートナーシップ構築」考察を発表した。

＜屋久島 FW（研究課題 C-2 国際共生学を踏まえたボランティアの充実）＞

自然保護のためのボランティア活動とフィールドワークを通じ、国際共生のための社会貢献について考え実践することを目的とし、屋久島での現地学習と海岸清掃ボランティア活動を実施した（8 月 27 日～29 日、生徒 6 名、引率教員 1 名）。屋久島での海岸清掃を通じて考察し、海洋プラスチック問題の解決や景観改善に向けた研究と提言を稲稜祭および「SGH 成果報告会」で発表した。

＜韓国ハナ高校主催の国際シンポジウム参加（研究課題 C-3 WaISEC (Waseda International Symposium on Education and Culture) 実施）＞

世界に開かれた学びのプラットフォームとしての高校生国際学会の企画開発に貢献することを目的とし、Hana Academy Symposium2019 (HAS 10) に生徒 8 名（引率者 1 名）が参加した。HAS 10（7 月 22 日～26 日）の大会テーマは「AI と倫理」で、韓国・日本・中国・香港・タイ・ブルガリアの計 15 校約 280 名が参加した。本学院を含む日本からの参加校 6 校の生徒は、2019 年 1 月～7 月に合同事前学習会 4 回、発表用研究論文の審査を経て参加した。大会プログラムには研究発表と討論、ソウル市内 FW、文化交流会が組み込まれ、参加者および参加校間での質の高い学術ネットワークが強化された。

（オ）研究支援と成果の普及

＜各研究課題ベースの学院生対象課外講義＞

- ・研究課題 A-3 特別講義（6 月 8 日）：「研究テーマの決め方、中国の高校生との交流について」

原島野乃（早稲田大学文学部 2 年生）、大野日菜子（早稲田大学商学部 1 年生）

- ・研究課題 C-1 特別講義（9 月 19 日）：「近代化・植民地・ナショナリズム、そして和解」

浅野豊美教授（早稲田大学政治経済学部）

- ・研究課題 C-2 特別講義（4 月 26 日）：「大久保山の自然」

竹内大吾氏（早稲田大学自然環境調査室）

- ・研究課題 C-3 特別講義（10 月 30 日）：「What is "Partnership"？」

Ms.Tri Indaryati（SMA N2 Yogyakarta 教諭）

＜「SGH 成果報告会 生徒発表の部」での研究発表＞（11 月 2 日、1 年生全員聴講）

研究発表（口頭）：在校生 2 本、シンガポール NJC 生徒との協働研究発表 1 本、ジョグジャカルタ生徒との「SGH 学術交流ウィーク」成果総括の協働発表 1 本

＜生徒による SGH 研究課題成果発表（他団体派遣）＞

- ・“International Humanities Symposium 2019 in National Junior College”（National Junior College 主催、7 月 19 日）発表生徒：本学院生徒 6 名、NJC 生徒 6 名（共同研究発表）対象：大会参加者
- ・“10th International Symposium at Hana Academy Seoul (HAS10)”（韓国・ハナ高校主催、7 月 22 日～26 日）発表生徒：2・3 年生 8 名 対象：HAS10 参加者（6 カ国）
- ・「蘇州中学・日本本庄高中 学術交流会」（中国・江蘇省蘇州中学主催、7 月 30 日）
発表生徒：1・3 年生 4 名 対象：学術交流会参加者
- ・「第二次日韓高校生共同学術交流サマーキャンプ」（ソウル国際高校主催、8 月 5 日～8 日）
発表生徒：2 年生 5 名（ソウル国際高校生徒との共同発表） 対象：フォーラム参加者
- ・「『世界津波の日』2019 高校生サミット in 北海道」（北海道・北海道教育委員会主催、9 月 10 日～11 日）発表生徒：2、3 年生 3 名 対象：大会参加者（海外 43 カ国および国内高校）
- ・「教育の国際化研究会：2019 年度第 1 回研究会」（早稲田大学情報教育研究所主催、10 月 30 日）
発表生徒：研究課題 B-1 での共同研究参加者（シンガポール生徒 6 名、本学院生徒 5 名）
対象：「教育の国際化研究会」メンバー、AEW 国際協働学習参加生徒および引率教員
- ・「2019 年度全国高校生フォーラム」（文部科学省・筑波大学主催、12 月 22 日）
発表生徒：1、2 年生 4 名 対象：同フォーラム参加者

（カ）英語授業について

＜習熟度別グループ授業の継続＞

第 1 学年「英語表現Ⅰ」と第 2 学年「コミュニケーション英語Ⅱ」で各 1 単位、および第 3 学年「英語表現Ⅱ」で Standard と Advanced のクラス 2 分割授業を通年で実施。授業中のパフォーマンス観察および第 3 学年全員を対象にしたアンケートの結果を受けて、評価法について学外の知見も得ながら研究を継続している。

＜外部英語試験＞

全校生を対象に、4 月は GTEC Advanced (3 技能版)、9 月に TOEFL (3 年生全員、1・2 年生の上級レベル生徒) または TOEFL Jr (1・2 年生の標準レベル生徒) の受験を義務付けた。

＜課外授業＞

基礎的な英語の学習支援を希望する生徒を対象に「英語朝練」（原則週 2 回で始業前 30 分間）を実施。「春学期」は 5 月 28 日～7 月 11 日（10 回）、「秋学期」は 10 月 11 日～11 月 22 日（10 回）に開講した。「秋学期」は早稲田大学の支援による「自学自修」2 名が受講生へ質問対応や課題添削を担当した。「春学期」には 43 名登録し、34 名が修了、「秋学期」には 13 名登録し、11 名が修了した。

<授業実践研究>

以下の実践研究を行い、①と②は学内公開授業とした。

- ① 「コミュニケーション英語Ⅲ」で3年生の複数クラス横断授業（ポスターセッション）を計4セッション実施した。
- ② 「コミュニケーション英語Ⅰ」と「家庭基礎」において、教科横断型授業「チョコレート・プロジェクト」を2学期に実施した。「食と社会・産業」を家庭科で、「奴隷制度の変遷、チョコレートの歴史とカカオ農園での児童労働」と英語で扱い、カカオ豆からチョコレートを手作りする実習を海外交流校の生徒も交えて実施した。
- ③ 2年次の「政治・経済」で実施したソウル国際高校との協働学習の英語発表準備に、英語科メンバーが資料提供とソウルフィールドワーク支援でサポートした。

（キ）海外研修プログラム

17年度から、グローバル人材の育成を目的にする「アメリカ研修プログラム」を実施している。ISAが実施運営する、有料の語学研修やシカゴ大学・ハーバード大学ビジネススクールなどの見学、シカゴの高校生との交流など盛りだくさんの内容である。

「アメリカ研修プログラム」は、20年3月17日（日）～27日（水）の日程で行なわれる予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大により中止になった。

8.5 留学

教育のグローバル化に対応すべく、留学制度の改革（第一種・第二種留学制度、マニュアルの整備）に取り組むとともに、留学先の開発にも尽力している。2019年度は、Education New Zealandと協定を結び、フレキシブルなニュージーランドへの留学が可能となった。

（ア）長期留学

17年度から、従来の1年留年する形になる留学制度（「第1種留学」）に加え、留学期間を含めて3年で卒業することができる「第2種留学」の内規を定め、運用している。これは多様な異文化体験を通して複眼的思考を養い、帰国後、日常生活及び学校生活においてより一層の活躍を期待することを求めるためである。

- ・ 本年度は第2種1名、第1種4名である。
- ・ 本年度末に世界的に流行したCOVID19の影響で、5名中3名は3月末で日本に帰国した。また、2名は現地の学校に留まり、そのまま海外の大学を目指すことになった。

（イ）短期留学

- ・ スイス公文学園高等部が提供する短期海外派遣プログラム“Summer in Leysin”に生徒1名が参加（7月～8月、6週間）。
- ・ 韓国ハナ高校（Hana Academy Seoul）と交流合意書を交わし、本校生徒2名を派遣（3月、2週間）するはずであったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で中止となった。

(ウ) 留学受入れ（長期・短期）

- ・ 台湾からの長期留学生 1 名（9 月～、日台交流協会）。新型コロナウイルス感染拡大の影響で 3 月末に帰国。
- ・ 韓国ハナ高校から、上記交流合意書に基づき、短期留学生 3 名（1 月、2 週間）。
- ・ ハワイから短期留学生 1 名（9 月 17 日～29 日）。

9. 学校評価

9.1 自己評価の実施状況

この学校自己評価については、2020 年 3 月に項目ごとに担当者を割り振り、原稿を依頼した。2 月中旬から拡大した新型コロナウイルス感染に伴い、早稲田大学はキャンパス閉鎖、教職員の在宅勤務を行った。この指示に従い、5 月 31 日まではキャンパス閉鎖・在宅勤務の予定であり、6 月 27 日までオンライン授業継続の予定である。この間、学校活動がほとんどできなかった。そのため、メールで原稿を収集し、編集を行った。

(ア)保護者へのアンケートは学校閉鎖により実施できなかった。

(イ)生徒からの授業評価は実施したが、この間の学校閉鎖により事務系端末が使用できないため、この報告書には間に合わなかった。

(ウ)学校関係者・第三者の評価を得るため、委員会を Zoom を使い、5 月 27 日に実施した。

9.2 教育目標と 2019 年度自己評価の主な点

以下（ア）～（オ）は、2020 年度 Waseda Vision150 会議への本庄高等学院の報告として大学へ提出した内容からの引用である。

(ア)本校の魅力や強み

本校の特徴を一言で申し上げると「自由と多様性」です。多様で資質の高い生徒を 6 つのカテゴリーの入試選抜により、世界中から集めています。海外に自宅がある生徒でも地方出身者でも早苗寮（男子寮）・梓寮（女子寮）を備えているため、本校で充実した学院生活を送る事ができます。入学後は、それぞれの学院生の持つ多様な考えや文化に揉まれながら、自由な校風の中で人格を形成していく事になります。同時に、広大なキャンパスにおける四季折々の変化の中で多感な高校時代の 3 年間を送る事が延び延びとした感受性を養います。質が高く工夫された授業によって個々が持つ多様な能力はさらに伸ばされますが、2 年時からとりかかる「卒業論文」を軸とした長い探求活動、SSH・SGH 活動の歴史の中で育まれてきた海外校とのネットワークを使った国際交流、地元の小学生や市民大学で講師をする地域貢献活動、各教員の持つ多彩なプログラムなどに参加することは、大きく学院生たちを成長させることでしょう。附属校だからこその大学との連携プログラム、OG/OG を招いてのキャリア教育は自己を見つめ直し、将来への展望をイメージさせ、ミスマッチのない進学学部を選択に役立つことでしょう。

(イ)入試改革とそれに対する 2019 年度自己評価

① 2020 年度入試改革の状況

2020 年度一般入試・帰国生入試において、2 次試験（面接）を廃止した。それ以前には 1 次試験

(3 教科、早稲田会場・本庄会場選択可) で合格した者は改めて数日後に 2 次試験(面接、本庄会場のみ)を受け、さらに入学手続きに本庄学院に来校する必要があった。特に地方出身者や帰国生においては、2 次試験や入学手続きのためにわざわざ遠路から本庄に最大 3 回来る必要があり、このことが本校受験を敬遠する要素になっているのではないかという判断からである。また、今まで競合する私立高校の中で本庄学院の入学手続きは最後であったが、入学手続き日程が早まる事により、競合校と入学手続きを迷っている資質の高い生徒を確保する事につながるのではないかと判断した結果である。また、2020 年度入試より、願書を Web 化した。このことにより、事務処理作業が大幅に軽減された。

② 入試広報の展開状況

入試広報活動は、例年のように「本校主催の学院説明会」「塾や予備校主催の説明会」「海外日本人学校向けの説明会」の 3 カテゴリーで実施した。学院説明会は例年同様 3 回だが、今年度は初めて対象を地元中学校に特化した説明会と希望があれば中学校に出向いての説明会を開催した。海外説明会はアメリカコースと欧州コースに参加した。女子寮がまだ定員の半分程度しか満たされておらず、説明会では寮の存在と魅力とを強調して PR した。

(ウ)教育関連

① カリキュラム改定の取り組み

2022 年度の新指導要領施行に向け、新カリキュラム検討委員会を中心に精力的に検討を行った。限られたコマ数の中で教育効果が高いカリキュラムである事はもちろんであるが、本校の大きな特色である卒業論文を軸とする探求活動やキャンパスの利用などと有機的な関連付けが求められる。

② 卒業論文指導の強化

GEC アカデミックライティングセンターの協力の元、「テーマ設定」「パラグラフライティング」「知的所有権への配慮」をテーマに 3 年生に対して 3 回の講座を実施する事ができた。また、かねてより「テーマ設定は 2 年時からが望ましい」という意見があったのを受け、2 年時に一度講座を実施する事ができた。生徒に評価の基準を明確にするとともに論文の書式のイメージを作るため、今年度より優秀卒論を集めて冊子化する事とした。その他、卒論マニュアル作成、担当教員による指導・評価体制、慶應湘南藤沢との合同卒論報告会等については従来通りである。

③ 学部推薦選抜制度の充実

本校の大学学部推薦は学院 3 年間の総合点に卒論の評価を加えたもので判断していたが、一芸に秀でた者・モチベーションの高い者の推薦を目的として、各学部・学科・専修の 1 割を超えない生徒を多面的評価で推薦する制度(G 選抜)を 2018 年より開始した。2018 年度の反省を踏まえ、2019 年度も実施したが、応募者数・推薦者数ともに 2018 年度よりも減じた。PR も含めた制度の検討が求められる。

④ 国際交流プログラムの充実

例年のように Mahidol Wittayanusorn School (タイ)、National Junior College (シンガポール)、Hana Academy Seoul (韓国)、蘇州中学 (中国) との生徒訪問・生徒受け入れの交流が行われた。修学旅行では、台中市立第一高級中学 (台湾)、安養外国語高等学校 (韓国)、北京大学附属中

学校（中国）を訪問し、交流活動を行った。SGH 最終年度であり、National Junior College（シンガポール）、SMA Negeri2 Yogyakarta（インドネシア）を招聘し、SGH 課題研究発表を中心とした学術交流ウィークを 10 月 30 日～11 月 2 日の期間で実施した。このような高校生シンポジウムのホストスクールとして、関わった生徒たちにおける教育効果は高いが、ポスト SGH 後にこのようなプログラムをどう継承させていくかは今後の課題である。

⑤ 地域連携プログラムの充実

2012 年度より本校の河川研究班（毎年希望者を公募し、10 名ほどで構成）は本庄市内藤田小学校と連携し、本庄市内河川調査と環境保護活動を行っている。また、藤田小での 5・6 年生の総合学習で科学や環境を理解することを目的とした授業を年 10 回ほど展開している。今年度も同様に実施した。2018 年度より本庄プロジェクト推進室の協力により、本庄市内小学校で学院生が授業を行うプログラムが始まった。参加生徒は公募している。今年度も同様に実施した。本庄市の依頼により市民総合大学（ジュニアの部）では、茶道部と河川研究班が授業を担当した。神川町の小学生と早稲田大学国際教養学部留学生との交流プログラム「グローバルキャンプ in かみかわ」では 4 名の学院生が通訳を務めた。

⑥ キャリア教育の充実

大学学部進学後のミスマッチや将来を視野に入れた上で学部選択をするきっかけになる事を目指し、2018 年度より月 1 度、土曜日放課後を使い、本校 OB/OG を招待してキャリア講座を開講している。従来、夏に大学教員による最先端研究の講座を中心とした「サマーセミナー」、冬に OB/OG を招いて「ウィンターセミナー」を開催していたが、「日常的に将来について考える習慣を身につけさせたい」として、行う事となった。今年度は、サマーセミナー・ウィンターセミナーにおける学院生の参加率が悪い事を考え、これらを 9 月中 2 回の水曜日・土曜日に集中して行う「秋のキャリアウィーク」を行う事となった。月 1 度のキャリア講座はそのまま継続している。結果として、秋のキャリアウィークを開催した事は参加学院生の増加にはつながらなかった。また、月 1 度の講座も 2018 年度よりも参加者が減少した。理由を精査し、PR 方法などを検討する必要がある。

(エ)国際関連

- ① 留学提携校の拡充 2018 年度に 1 年間留学をしても高校 3 年間で卒業できる「第 2 種留学」制度を作った。が、必ずしも留学希望者が増加している訳ではない。今年度、Education New Zealand (ENZ)、アメリカ KENT School との留学協定を結んだ。特に ENZ では個人の目的に沿ったフレキシブルな留学内容がカスタマイズできる事が魅力で、留学生増加につながることを期待している。Hana Academy Seoul（韓国）との相互短期留学生交換を行った。
- ② 留学マニュアルの整備留学推進を図るために、留学マニュアルの整備を行った。

(オ)2020 年度教育目標

- 多様で資質の高い生徒を受け入れる環境の充実全国・世界から多様な生徒を受け入れるために、2019 年度に続き入試改革に取り組みます。そのような生徒の受け皿として魅力的な寮の在り方を目指します。
- ミスマッチのない学部進学と将来設計を目指して基礎学力と知的好奇心を備えた生徒を育成するた

めに、学部との教育活動の連携や情報交換を密にするとともに、2019 年度に加えさらなるキャリア教育の充実を図ります。

- 教育効果の高いカリキュラムの検討・未来的な授業の実施 2022 年度の新指導要領改訂を目指し、教育効果の高いカリキュラム検討を精力的に進めます。未来的なメソッドの開発による効果的な授業を目指します。
- 新体育館が広げる本庄学院教育の可能性 2020 年度より使用可能になった新体育館により体育や部活動の充実が期待されることはもちろんですが、イベントの多様性や地域との連携を視野に入れ、教育効果の高い施設運営を検討します。

9.3 学校関係者評価

2019 年度年度学校評価 関係者評価会記録

文責：川村

(ア)日時：令和 2 年（2020 年）5 月 27 日 17:00～18:30

(イ)場所：本庄高等学院大会議室（オンライン会議）

(ウ)参加者

第三者評価委員

- ・笠原 健志 氏（高崎市立八幡小学校校長）
- ・清水 久美 氏（高崎市教育委員）

学校関係者評価委員

- ・首村 努 氏（早稲田大学本庄プロジェクト推進室室長）
- ・林 之成 氏（2019 年度 保護者の会会長）

本庄高等学院

- ・半田 亨 （教諭、学院長）
- ・影森 徹 （教諭、教務担当教務主任）
- ・坂井 淳一（教諭、生徒担当教務主任）
- ・薮 潤二郎（事務長）
- ・川村 悠太（職員、記録、司会）

(エ)進行

- ・半田学院長による開会の挨拶。
- ・影森教務主任より、本評価会の開催趣旨について説明。
- ・影森教務主任より、本庄高等学院の沿革、理念・目的、教育活動、課外教育、特色等について説明。

関係者評価

- ・関係者評価については、章ごとに質疑応答をする形で実施した。その内容は以下の通りである。

1. 教育理念・目的・人材育成像について

〈教育理念について〉

・首村委員より、学院の「自然と大地に親しむ」という教育理念を高く評価する言をいただいた。しかしながら同時に同委員より、新幹線通勤の生徒が増えてきた現状を鑑みると、今後は本庄市内がただの通学路に終わる可能性を危惧しているという指摘とともに、大久保山学などの取り組みを通じて、生徒がより本庄という土地に慣れ親しんでくれることを期待する発言をいただいた。

2. 教育課程・学習指導について

〈第2外国語教育について〉

・清水委員より、第2外国語が設置されているが、どのレベルを目指した教育なのかという質問があった。

→これについて影森教務主任より、大学1年生レベルの初級教育である点を説明した。

〈大久保山学について〉

・笠原委員より、課題解決型授業としての大久保山学の扱い、また小学生との共同研究の実態について質問があった。

→半田学院長より、大久保山学のカリキュラム上のあつかい、進路指導上の意義、具体的な各コースの特徴について説明した。また河川研究プロジェクトの詳細についても説明した。

・上記に案件について本庄プロジェクト推進室室長として首村委員から、本庄プロジェクト推進室の活動と本庄高等学院の連携、本学院の生徒と児童の交流について補足説明がされた。また影森教務主任からも小学生を対象とした実験教室の沿革を補足説明した。

〈卒業論文について〉

・林委員より卒業論文のアーカイブ化がなされているのかについて質問があった。

→影森教務主任より、数年前までは全て保管されていたが過去に返還要望があったため、現在はすべて残っていないこと、その代わりに優秀論文といった制度を導入したことを説明した。

3. キャリア教育（進路指導）について

〈高大連携教育について〉

・清水委員より、高大一貫教育に参加した生徒の感想・要望について質問があった

→影森教務主任より、就職の部における関心高さと、それに対し学問的なものは、出席率は低いが参加者の意識が高いことを説明した。また、こうしたキャリア教育に関する全体的な出席率は残念ながらそれほど高くないことも補足説明した。

4. 生徒指導について

〈生徒指導〉

・坂井生徒指導担当より現状の生徒指導と校風について補足説明した。

〈校内美化〉

・首村委員より校内美化の具体的な方策について質問がなされた。

→坂井生徒指導担当より生徒が清掃をしないことによる美化意識の低さがある事実が指摘された。また 3 年前から実行している美化政策（放置物の改修・返却）の概要、またそれによる生徒の意識の変化を説明した。そのほか、美化に対する生徒会の活動について影森教務主任より説明した。

〈挨拶について〉

- ・首村委員より、学院に来校した際、挨拶をする生徒が多く大変満足しているとの声をいただいた。

5. 保健管理について

〈カウンセリングについて〉

- ・林委員よりカウンセリングの実績について質問があった。

→影森教務主任より、カウンセリング内容は守秘義務による守られている点、人数は延べ 100 人以上いること、相談内容の大まかな傾向、生徒指導と関連するものについてはカウンセラーと情報を共有することを説明した。

6. 安全管理について

本章についての意見・質問はなかった。

7. 組織運営について

〈面接の廃止について〉

- ・清水委員より入試で面接をなくしたとのことだが、そのデメリットは考えなかったのかと質問があった

→影森教務主任より、過去、雪により面接を中止した年があったが、その後の成績・生徒指導に影響がなかったことから面接が不要であると考えた経緯を説明した。

〈委員会について〉

- ・清水委員より委員会の任期について質問があった。

→影森教務主任より、ほとんどの委員は 1 年で任期が終わること、継続性が重要となる委員は複数年にまたがることを説明した。

- ・また清水委員より学校側の判断で委員の移動は可能かについて質問があった。

→半田学院長より、過去にその事例がないこと、またその逆に教務から委員嘱任の指名もできないことが説明された。

〈職位定年について〉

- ・林委員より高校の定年制度について質問があった。

→影森委員より約 10 年前から制度が変わったため、制度変更前に採用された教員は大学と同じ 70 歳定年、変更後に採用された教員は 65 歳定年であることを説明した。

〈働き方改革について〉

・笠原委員より本学院における働き方改革について質問があった。

→半田学院長より、まず本学院の労働形態が変形労働制を取っていること、そして次に部活動の改革に着手したいとの考えを説明した。このうち部活動改革については試合の引率、指導をなくすため外部指導員のシステム構築をしたいとの発言があった。

また影森教務主任より変形時間労働制のメリットとデメリットについて補足で説明がされた。

・上記について林委員より、外部の者が指導に関われるのであれば保護者も指導員とし活動ができれば、保護者の会として部活動を支えられるとの意見があった。

→これに対して坂井生徒担当より、ラグビー部における保護者が指導に当たっている例を説明した。また林委員の提案の実現には本庄という立地の問題が立ちはだかるとの指摘をした。

・坂井生徒担当の説明に対して林委員は、この件は初耳であること、こうした情報を正確に得るべく学校とコミュニケーションをとる機会がもっと増えると嬉しく思うとの返答がなされた。

8. 研究および交流活動について

〈修学旅行について〉

・清水委員より、修学旅行は全員参加なのか、また不参加者がいる場合その理由について質問があった

→坂井生徒担当より部活動の大会との関係で不参加者が存在すること、しかしそれらはあくまでも生徒の意思によるものであることを説明した。またご傷病や精神的な理由で欠席するものもいるが稀な例外的事項であることも補足した

〈留学について〉

・首村委員より、卒業に4年かかる留学1種があえて選ばれる理由について質問があった。

→影森教務主任より、2種留学には成績条件があること、またその理由について説明をした。また出発時期も1種留学が選ばれる一因であることも補足された。

・林委員より、留学生で今年帰国せず海外にとどまった生徒はどのような扱いになっているのか、今年度の留学者数は例年と比してどうかについて質問があった。

→影森教務主任より、当該生徒が本庄高等学院を退学し、留学先の高校に編入していることを説明した。また人数は例年通りであると説明がされた。

・清水委員より、〈留学生受入の交易財団法人のボランティアとしての立場から〉留学生が学院を訪れた時の学院生の交流意識の高さおよび学院の留学生受入体制のスムーズさに満足しているとの謝辞をいただいた。

9. 学校評価について

本章についての意見・質問はなかった。

10. 情報提供について

本章についての意見・質問はなかった。

11. 保護者・卒業生・地域住民との提携について

〈保護者の会〉

・林委員より、保護者の会会長として大久保山散策ツアーなどのイベントが保護者に非常に好評であったこと、3年間父兄も従事して学院生活を楽しむことができたことが伝えられた。また情報環境の推進も安心しているとのコメントをいただいた。他方で今回のコロナの対応が今回の学校評価に組み込まれていないのはやや不満であり、組み込むべきとの意見も寄せられた。

また退学・退寮について非公表とせず然るべき情報公開してほしいこと、寮の治安に波がないような仕組みをつくり視覚化してほしいことを要望として挙げた。

→影森教務主任より、本年度の退学者について説明をした。退寮については坂井生徒担当より説明をした。また坂井生徒担当はその他、寮生活についての所感、寮生活向上のための施策を現在管理会社と相談していること、しかし生徒からは「寮ぐらいほっといてほしい・のんびり生活したい」という声があるというバランスのとり方の難しさについて言及した。そして最後に今回のコロナウィルスの一件で、寮生の安全確保の寮内の衛生管理の困難さを実感しており、不在時の寮費の返還も大きな問題として立ち回っていることを話した。

〈地域連携〉

・首村委員より、市との連携を中心とした学院生の活躍に対し謝意を表明いただいた。また地域だけでなく大学・企業との連携が今後深まることを期待する意見が寄せられた

12. 教育環境整備について

本章についての意見・質問はなかった。

おわりに

- ・半田学院長が本会に対する感想を述べ、委員の皆様へ謝意を伝えた。
- ・影森教務主任より本議事を学校評価として埼玉県学事課に提出する旨を伝えた。

上記をもって閉会とした。

10. 情報提供

10.1 学校が公開・発信する情報

（ア）学校活動の広報

広報誌として『緑風』と『杜』を発行している。

『緑風』は 本庄高等学院の発行する学校サイドの広報誌で、6月と12月に発行し、教員や生徒が執筆するコラムや行事報告、クラブ活動の戦績報告などで構成されている。

『杜』は保護者の会が発行する保護者サイドの広報誌で、「杜」編集委員会により、年1回、3月に発行される「保護者の会だより」で、同委員会の自主的な取材・編集により、学院施設や生徒行事・トピックの紹介、保護者の会の活動報告などを掲載している。

学校 Web サイト (<https://www.waseda.jp/school/honjo/>) ではタイムリーなニュースや出来事を継続的に発信しており、トップページの写真やリード文を見るだけで、本学院の最新の動向が伝わるようなページ運用を行

なっている。ホームページにおける課外活動のページでは、部活動ごとの活動概要（部員数・活動日・実績）を伝えるとともに、独自の Web サイトがある公認団体（クラブ）は、クラブ独自の情報発信を行なっている。更新作業が追い付いていかないのが難点である。学校にとって、今や Web サイトは情報化社会の現在、学校の情報を広く知ってもらい、必要な情報や書式を得るための重要な手段である。2020 年度入試より、一般・帰国生入試において Web 出願としたため、受験生は基本的に本学院の Web サイトを必ず見なければならないことになっている。タイムリーで正確な情報発信は Web サイトの必要条件であり、このことに向けての体制づくりが必要である。

（イ）保護者・生徒への連絡・広報

保護者への連絡・広報

本学院保護者に対して、迅速かつ確実に情報を伝達するため、FairCast（NTT データ（株）提供）システムを導入し、基本的に保護者のメールアドレスを登録している。災害・緊急時の情報伝達のみでなく、日常の事務連絡にも用いることで、保護者への迅速な情報発信を行なっている。

生徒への連絡・広報

生徒に向けての連絡は、通常は LHR や授業時に行うことで問題ないが、警報発令時の連絡、秋の台風 19 号通過後の学校からの連絡、生徒達に配布している学校生活マニュアル集「学院生活のしおり」によらない緊急連絡などは Web サイトを使って発信・連絡している。特に、2019 年度末 3 月 2 日以降の一斉休校以降における、新型コロナウイルス感染拡大に伴う学校からの様々な情報提供はすべて Web サイトを用いてその都度こまめに行い、なるべく生徒・保護者の不安を解消することを目指した。

2019 年に導入された「計画運休」など新しい災害対応システムに「学院生活のしおり」が対応していないなど、更新が必要な部分があったため、2020 年度版は、実態に沿うよう、全面的に改訂を行った。

（ウ）学校に寄せられる情報

学校に寄せられる情報としては、以下の種類がある。

警察・消防署・本庄市からの情報

不審者や災害状況などに対して注意を喚起する情報が寄せられることがある。必要に応じて、生徒に下校時の注意などを呼び掛けている。

市民・公共交通機関乗車客からの情報

市民の方、電車の乗車客の方から、主として生徒に対する苦情が寄せられることがある。状況を詳しく伺い、必要があれば生徒に注意を与えるとともに、ご指摘いただいた方に対しては真摯に対応するように努めている。

11. 保護者・卒業生・地域住民等との連携

11.1 保護者会

例年、年 2 回実施している。第 1 回目は 6 月初旬の土曜日放課後に開催する。クラス幹事決定と 1 年

間の学習や行事に対する諸注意が内容の基本である。第2回目12月冬季休業に入った最初の日曜日に開催する。クラスや行事の状況報告、進級進学に向けた指導が内容の中心となる。3年生では、ミスマッチのない学部選択に向けた進路指導のため、この保護者会においてクラス組主任との間で三者面談が多く開催される。

19年度は6月8日（土）と12月14日（日）に保護者の会を実施した。全体会・クラス別懇談会・個人面談という構成で行なわれ、2回とも全体会の後、生徒寮保護者会が実施された。12月の保護者会では大学国際部国際課の協力で留学の勧めのプレゼンテーションが行われた。例年、全大会は教務や保護者会会長からの挨拶で終わるのであるが、このような生徒たちの学ぶ機会の拡大について情報を得ることも必要であると感じた。

今後は、保護者会を単なる生徒の様子を報告・相談する場としてだけでなく、保護者が求める進路・留学・奨学金などの情報、更には講演会などのサービスを提供する場としての機能も求められていくと考えている。

11.2 卒業生との連携

（ア）同窓会

同窓会の活動内容が充実している。19年度の学院教育への連携・協力体制も、例年通りに、学院からの依頼に対し、誠心誠意対応していただいた。学院からの依頼は、キャリア教育の一環としての秋のキャリアデザインウィークへの講師派遣、稲稜祭での出店の協力などであった。秋のキャリアデザインウィークは今年度初の試みであるが、どの講座も参加生徒が多く、盛況であった。稲稜祭では学院生への同窓会グッズのプレゼントもあり、大変好評であった。

ホームページには、クラス会の開催案内等が載り、その情報は随時更新されている。役員会も定期的に開催され、次年度に向けての活動に備えている。また久しぶりにホームカミングデイを開催するという案が提案されている。

本庄高等学院創立50周年記念式典に向けて、長い時間をかけて同窓会と相談を重ねたいと考えている。

（イ）秋のキャリアデザインウィーク

OB/OGによるキャリア講座は、例年12月期末試験終了後の土曜日放課後に開催されていた。参加者が少ないことから今年度は、「秋のキャリアデザインウィーク」として9月の2回の土曜日に開催することとした。多くの生徒たちが参加して盛況であった。詳細は、秋のキャリアデザインウィークの項をご確認願いたい。

11.3 地域との連携

本庄学院では、開校以来、教員の持つリソースや学校設備・器具を用い、地域の人たちに向けて講習会や特別講義を公開してきた。本庄キャンパス内に本庄プロジェクト推進室ができてからは、連携を行い、多様な講座を地域に公開している。2018年度より、本庄市内小学校へ出張授業を行うプロジェクトが始まっている。また、生涯教育を目的とした市民総合大学、子ども大学本庄にも講師・副学長の立場で協力を行った。

（ア）科学関連プログラム

本学院は 02 年にスーパーサイエンスハイスクール（SSH）制度開始とともにその指定を受け、以後、05 年に再指定、10 年に再再指定され、全国の SSH 校の中で最古参である。15 年度、16 年度は経過措置校として活動を継続した。17 年度、18 年度、19 年度については SSH 指定を受けていないので、これまでの SSH の取り組みを整理しいくつかのプログラムを継続している。長い SSH 活動の中で、培ったリソースを地域に還元し、小さい頃から科学に親しむ子供を育成することを目指し、いくつかの科学教育プログラムが実施されている。

河川研究班による水環境プロジェクトおよび本庄市立藤田小学校との合同河川調査

本学院は 09 年度より「河川研究班」というプロジェクトチームへの有志を毎年 10 名ほど募り、早稲田大学創造理工学研究科社会環境工学科研究室・本庄市・地元 NPO 法人・埼玉県環境科学国際センターとの連携で行なう市内 2 河川の環境調査・環境保全・啓蒙活動を継続してきた。この活動は部活動とは別に行われているが、ほとんどの生徒が部活動のように 3 年間継続するので、基本的に毎年新学期に新入生を含めた有志を数名補充する形になっている。12 年度より藤田小学校と合同河川調査を年 2 回行っている。

19 年度も藤田小学校との合同河川調査を春と秋 2 回実施した。事前学習も行なった。

河川研究班によるプロジェクト形式の水環境を取り巻く研究では、「河川エビの性比と環境ホルモンの関係」「日本の河川環境に適した小型水力発電機の開発」「河川の汚泥を発電に活かす試み」を有志が行なった。水力発電機と汚泥発電の研究成果は、朝日新聞社主催 2018 年度 JSEC 高校生科学技術チャレンジで入選を獲得することができた。

藤田小学校および市内小学校の講師

12 年度より、本庄市立藤田小学校第 5・6 学年の年間総合学習の年間講師を本学院生徒がつとめている。内容は、環境問題へ問題意識を高める事、科学への興味関心を高める事、プレゼンテーションスキル向上を中心としている。19 年度は計 10 回の授業を計画していたが、年度末の新型コロナウイルスの影響により、1 回中止となった。

また、18 年度より同キャンパスにある早稲田本庄プロジェクト推進室との連携により、本庄市内小学校での講義を行っている。今年度は、旭小・西小・東小・北泉小・南小・共和小・児玉小で各 1 回の講義（2 時間続き）を実施した。講師は学院内で公募した生徒たちである。内容は基本的に「科学の楽しさを伝えるもの」「河川環境問題を伝えるもの」である。

本庄市民シンポジウム「川のシンポジウム 2020」

20 年 3 月 14 日（土）に早稲田リサーチパークにおいて、本学院と藤田小学校の主催で開催を予定していたが新型コロナウイルス感染リスクを懸念し、中止となった。例年、本庄市民に向けて市内河川環境の啓蒙活動を目的として、この時期に実施している。

高校と小学校が市民に向け、河川環境について啓蒙するシンポジウムを開催するということは全国的にも極めて稀な例として注目を集めている。

親子科学教室

SSH 事業成果の地域還元を目的とし、毎年夏冬の 2 回（出張授業を含む）、本学院実験室で親子科学教室を開催していたが、今年度は予算の都合で実施できなかった。

（イ）本庄総合市民大学講師

本庄市が生涯教育を目的として市民に向けて開催している本庄総合市民大学の講師を教員、生徒が務めている。2019 年度は以下の講師を生徒が務めた（すべて夏休みに 1 回ずつ）。

- ・ 「茶道の基本を教えます」（茶道部）
- ・ 「100 万年前の虫を探そう」（河川研究班）
- ・ 「楽しくチアダンス」（應援部）

（ウ）子ども大学本庄への協力

本庄市が市内児童向けに夏休みプログラムとして開校している子ども大学本庄の副学長を学院長が務め、2 名の教員が講師を務めた。

- ・ 【はてな学】レーザー光線で不思議な模様を作ろう（午前、午後、70 名参加）
- ・ 【はてな学】いかにして速く走るか？！～速く走る技術と練習法について～（午前、午後、70 名参加）

（エ）七高祭

7 月 28 日（日）に、本庄市内の 7 つの高校が合同で文化祭を行なう「七高祭」が開催された。これは、16 年度に本庄市合併 10 周年・はにぽんプラザオープンを記念して「六校祭」としてスタートしたものである。本学院からは書道部、演劇部、ピアノ部、軽音楽部、美術部、写真部が参加し、日頃の成果を披露した。また、生徒会執行部のメンバーも、「七高祭」の実行委員として活躍した。

（オ）地域におけるボランティア活動

19 年度は以下のようなボランティア活動を行なった。

- ・ 第 3 学年による全市一斉清掃
- ・ 硬式野球部による野球場外側道路清掃
- ・ 市役所主催の花の植え付けに生徒会が参加
- ・ 市立北泉小学校における「Basic Study」への協力（授業支援、7 月の 3 日間）

（カ）地域への施設開放

キャンパス内への入退出管理などセキュリティの確保が難しいため、校舎・体育館などの学外への貸与は行っていない。外部団体から要請があった場合は、教諭会の了承の元、許可している。毎年、本庄市との友好的な協力関係を維持・発展させるため、本庄市民や中学校の陸上競技大会や、公益財団法人本庄早稲田国際リサーチパークと本庄市との連携事業である「こども大学本庄」の開校・修了式に会場を貸与している。また市民のウォーキングコースやクロスカントリー大会開催にも協力している。

11.4 被災地におけるボランティア活動（どんぐりプロジェクト）

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)が取り組んでいる「どんぐりプロジェクト」に参加した。これは「海の針葉樹林コミュニティ支援プログラム」の一環で、東日本大震災の復興支援が目的である。宮城県気仙沼市で採取したどんぐりの種を育て、成長した苗木を現地に植樹して防潮林を形成し、防災に役立てようとするものである。学部学生や WAVOC のスタッフとの月 1 回程度のミーティングでプロジェクト参加者同士の親睦を図り、活動を確認している。

8 月 30 日（金）～9 月 1 日（日）には生徒 20 名と教員 2 名および WAVOC のスタッフとともに気仙沼市の東日本大震災復興記念前浜マリンセンターで植樹ツアーを行い、現地の方々の話を聞いたり、今後の防災の在り方を考えるフィールドワークに参加したりした。また、稲稜祭では気仙沼産海産物の乾物や銘菓を販売し、その売上金の一部を気仙沼市に寄附した。

12. 教育環境整備

12.1 施設・設備

（ア）新体育館の竣工

新体育館の工事は 18 年 7 月から本格的に着工され、20 年 2 月に完成した。これは敷地面積 63,077.60 m²、延床面積 4,326.87 m²、地上 3 階の建物である。新体育館落成により、稲稜ホールから新体育館までと東西に長い施設配置ではあるが、本学院の教育施設は一応の完成を見たこととなる。

（イ）学内施設

教室

教室は普通教室 23、ゼミ室 4、理科実験・講義室 5、情報処理室 2、美術室 1、体育講義室 2、地理演習室 1、音楽教室 1、家庭科調理室 1、メディアルーム 1、CALL 教室 1、大教室 1 で構成され、各教室には I T 機器とスクリーンが設置されている。

稲稜ホール

稲稜ホールは学年集会や、各学年対象の健康教育講演会、外部有識者による特別講演会、その他様々なイベント、音楽の授業やブラスバンド部・グリー部の活動、演劇部・軽音楽部等のミニコンサート等に常時利用されるほか、学外の機関の利用にも供している。それらを含め年間の施設利用回数は 100 回を超える。本学院の教育活動上極めて重要な役割を果たしている。

CALL 教室

PC 教室に隣接した 46 名対応の教室である。教卓周辺はスクリーンを使った発表に適した広めのスペースがあり、2 名 1 組の机には P C、カメラ、マイク付ヘッドホンが備わっている。授業の展開に応じてアクティブラーニングや音声・文書ファイルの配布と回収が可能である。放課後は事前予約制で、発表リハーサルや課外講義、説明会やワークショップにも活用されている。

2019 年度活用事例としては、始業前 30 分間の「英語朝練」や英語の学内公開授業（ポスターセッション）会場としての使用例があった。

コンピュータ・インターネット環境

95 号館を使用するようになってから、PC 室 2 室（46 名対応）を中心に授業や課外活動を展開している。PC 室は教科「情報」・選択科目以外に、情報環境を必要とする様々な教科で使用され、また、休み時間・放課後は生徒に開放され、生徒の創作活動・検索活動に役立てている。また全ての教室に LAN の情報コンセントとプロジェクター・スクリーン・書画カメラが設置されている。また校内数カ所に無線 LAN のポイントがあり、情報コンセントのない場所でも WiFi でノート PC やモバイル等のインターネットへの接続が可能である。このような環境のため、ノート PC や iPad を持参する生徒が増えている。校内の至る場所で課題や調べ物に役立てているようである。ネットワークの帯域幅にもストレスはない。

体育施設（新体育館以外）

サッカー場

サッカーコート 1 面を十分に確保できる広さであり、それを活かしたサッカーやハンドボール、ラグビーの授業展開ができています。授業や球技大会等行事、クラブ活動と年間を通しての使用頻度は非常に高い。水はけは非常に良好である。

ラグビー場・陸上競技場

陸上競技、ラグビーの授業展開が十分にできる広さである。体育祭、稲稜祭、球技大会、マラソン大会等の行事、また災害時の第一避難として定めており、その使用頻度は高い。クラブ活動では、陸上部、ラグビー部が使用している。

野球場

主にソフトボール、ゴルフの授業で使用している。各種目授業を十分に展開できる広さである。マラソン大会ではスタート地点とし、クラブ活動では、硬式野球部が使用している。

テニスコート

テニスコート 6 面（クレー4 面・オムニ 2 面）は、テニスの授業と、クラブ活動では硬式テニス部とソフトテニス部が共用している。

屋外施設全般

施設の整備、維持管理体制を体育科と各運動部で模索しながら、あくまで活動する生徒自身が主体的にその管理を進め始めている。

図書室

16 年度より運営に業務委託を導入したが、利用者へのサービスはほぼ今まで通り行っており、委託に伴う大きな混乱等はなかった。15 年度に 90-7 号館へ移転したことに加え、16 年度から開室時間を 18 時まで 1 時間延長したことにより、入室者数は着実に増加している（一昨年度比約 50%増）。但し、図書室を頻繁に利用する生徒はまだ一部に限られていると思われるため、より多くの生徒に図書室を有効活用して貰えるよう、学内関係個所と協力しつつ所蔵資料の充実、図書室内の環境整備などに努めたい。

保健室

敷地が広大であるため、保健室から学院体育館、共通教室棟、稲稜ホールまで距離があり、そこでの急な傷病への対応が遅れがちである。移動方法、搬送手段については課題が残る。女子がベッドで休養するケースが多く、4床あるベッドが埋まることもあった。また、定期テストを保健室で受験する生徒が増加傾向にある。

食堂

食堂はホールとパンショップから構成されている（運営は早稲田大学生協に委託）。生徒の食堂利用時間は、主に11時00分から11時20分までのコーヒースタンドと13時10分から13時50分までの昼休みである。食堂の座席数は442であり、ピーク時間帯に一時的な混雑は見られるものの、概ね問題はないと考えられる。そのほかの付帯設備として、自動販売機4台、給茶機3台、食券販売機4台が設置されている。食事時間帯以外は生徒の自習スペースやコミュニケーションの場として有効に活用され、また学校説明会（個別相談）や学年集会などさまざまな学校行事にも利用されている。

12.2 スクールバス

朝日自動車株式会社に業務委託して、本庄駅・寄居駅と本学院を結ぶスクールバスを運行している。稲稜祭一週間前は準備のために始発バスに乗る生徒が増えるため増便を実施した。2学期後半から、部活が終了した3年生が遅い時間帯のバスに乗車するようになるため、バスに乗り切れない生徒が多数発生した。

12.3 寮

（ア）早苗寮

男子専用となって2年目の早苗寮の4月の入居状況は126名であった。自治会行事は、春の新入生歓迎会とクリスマス・ビンゴ大会を行なった。食事面では、朝食の喫食率は低い、夕食はほとんどの寮生が食べている。ゴミの分別が出来ていない寮生がいることと、登校する時間が遅い寮生がいることが課題である。

（イ）梓寮

梓寮は、2018年4月に誕生した女子専用寮である。2018年度は44名、2019年度は63名が入寮した。寮長・寮母が住み込み、他に複数の女性スタッフに寮生活をサポートしていただいている。自治会行事は、新入生歓迎会、納涼祭、クリスマス会、送別会などを行なった。8月に台湾からの留学生1名（滞在期間は1年間）、1月に韓国からの留学生2名（滞在期間は1週間）を迎えた。

補足

本庄高等学院におけるこの間の新型コロナウイルス感染リスクへの対応について

2020年2月中旬から急速に世界中に感染拡大した新型コロナウイルスへの本学院の対応について以下

に述べる。

この件に対する早稲田大学の動きは早く、学生・生徒・教職員・学校スタッフの健康と生命の安全を基本姿勢として、2月14日の時点で大学として最初のメッセージを発し、2月27日には卒業式の中止・入学式の中止を打ち出している。3月6日には、大学の授業開始を4月20日に延期、3月24日には授業開始を5月11日に再延期、4月6日にキャンパス閉鎖と全教職員の在宅勤務を発表した。

本学院では、例年であれば冬季にインフルエンザ感染者数を学年性別に校舎エントランスで発表し注意を喚起するのであるが、2月中旬以降は発熱者数を発表するとともに、エントランスに消毒用アルコールを設置した。2月27日の全国小中高の一斉休校の要請発令に従い、3月2日から一斉休校に入った。休校に入った初期は、このように休校期間が長くなるとは予想もしていなかった。3月中旬頃から、感染状況悪化の中、大学の指示を基本としつつ、本学院の方向について、臨時教諭会を開きながら検討を重ねた。

4月に入ってから、生徒が心理的に不安に陥らないこと・5月11日授業開始に向けて学習習慣を維持することを目的として、Web上で各教科が教材を置くこととした。5月11日からは時間割通りのオンライン授業をスタートした。またこの間、なるべく通常の授業日と同じような生活リズムを持たせるべく、6時限目の授業終了後、放課後には課外講義や部活動紹介、シンポジウムなどの行事をZoomで開催する努力を行ってきた。5月11日、オンライン授業スタートから2週間ほどは、早稲田大学が今年度より導入したLMSに生徒・教員が慣れていないこと、LMSサーバの負荷過多、生徒の通信環境などの理由でトラブルが多かったが、3週目以降は落ち着いた。

また、この間、生徒・保護者・教員への情報提供が必要であると考え、特に生徒・保護者に対しては、以下の方策を行った。

- (ア)相談に対して迅速に対応するために、生徒・保護者が相談する窓口を複数設ける。具体的にはオンライン授業に関する窓口、生活への悩みに関する窓口、寮に関する窓口、受験に関する窓口等である。
- (イ)生徒・保護者への学校からの情報提供をスムーズかつ迅速に行うため、4月22日以降、専用のWebページを設けた。

以下は、現在に至るまでの専用のWebページに記載されてきた内容である（中身は除いている）。本学院の新型コロナウイルス感染リスクへの対応姿勢の例としてご参照願いたい。

【重要】新型コロナウイルス感染リスクに対する本庄高等学院の対応について

在校生・新入生ならびに保護者の方々へ

新型コロナウイルス感染が拡大する中、早稲田大学は生徒・学生・教職員・スタッフの健康と生命を最優先事項として学校運営を行っております。

附属校である本庄高等学院もこの方針の元、新型コロナウイルス感染拡大状況を客観的に分析し、本学院の運営にかかわる諸事項を以下の通り策定いたしました。

度重なる変更でご迷惑をおかけしますが、引き続き皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

【新入寮生の入寮について 0530 版】 5/30(土)18:30 更新

【在寮生の帰寮について 0530 版】 5/30(土)18:30 更新

【学生相談室のEメールによる相談について】 5/13(水)12:00 更新

【短縮授業の実施について (5月11～23日 6月27日)】 5/9(土)13:30 更新 5/22(土)11:30 再更新

【寮で実施している新型コロナウイルス感染症予防対策について 0511 版】 5/9(土)10:40 更新

【「緊急支援金」と「オンライン授業受講に関する支援」について】 5/2(土)17:30 更新

【オンライン授業期間の延長について】 5/1(金)22:00 更新

【寮費の扱いについて】 5/1(金)22:00 更新

【新入寮生の入寮について 0501 版】 5/1(金)22:00 更新

【在寮生の帰寮について 0501 版】 5/1(金)22:00 更新

【寮生の居室の教科書の返送について】 5/1(金)22:00 更新

【新入寮生の発送済みの荷物・在寮生の居室のパソコンの返送について】 4/30(木)15:00 更新、19:00 追記

【新入生ガイダンス・始業式・授業開始・授業形態、および課外活動について】 4/24(金)21:30 更新

【新入寮生の入寮について 0424 版】 4/24(金)21:30 更新

【在寮生の帰寮について 0424 版】 4/24(金)21:30 更新

【各種相談・質問窓口の設置について】 4/22(水)17:30 更新

【2020 年度時間割の配布について】 4/30(木)16:00 更新

【(新入生向け) 部活動に関するご相談について】 4/22(水)17:30 更新

【Waseda メールの設定について】 4/16(木)17:30 更新

【学院生の皆さんへ、学院長からメッセージ】 4/14(火)23:40 更新

【帰寮(入寮)・帰省について】 4/13(月)18:40 更新

【休校期間中の過ごし方について】 4/8(水)20:10 更新

【休校期間中の寮生活について】 4/8(水)20:10 更新

【事務所臨時閉室のお知らせ】 4/7(火)16:15 追記 【5/27 再更新】

【※今後の新型コロナウイルス感染拡大・収束の状況などによって変更することがあります。】

【入寮に関する手続きのまとめ】 4/4(土)19:56 更新・4/5(日)12:55 訂正・4/6(月)13:20 追記・訂正

【梓寮の4階への引っ越しを予定している在寮生へ】 4/5(日)13:00 更新

【良識を持った行動を期待します】 4/4(土)19:56 更新

【卒業論文の第一次中間報告の締切再延長について(全新3年生対象)】 4/4(土)19:56 更新

【帰寮日を変更する場合について】 4/3(金)21:09 更新

【入寮日の変更について】 4/3(金)19:51 更新

【始業日・部活動開始日について】 4/3(金)19:08 更新

【始業日・部活動開始日の再検討について】 4/2(木)11:36 更新

【部活動の再開について】 3/28(土)17:54 更新

【理性を持った行動を期待します】 3/28(土)10:55 更新

【卒業論文の第一次中間報告の締切延長について(全新3年生対象)】 3/28(土)10:24 更新

【休校解除日について】 3/27(金)18:20 発表

【寮生の皆さんへ】 3/27(金)18:20 発表

本学院は、この文章を書いている 6 月 3 日現在、6 月 27 日までオンライン授業を継続する予定である。